

東九州自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— 16 —

福岡県築上郡上毛町所在遺跡群の調査

土佐井遺跡 2 区・土佐井小迫遺跡

唐原山城跡・穴ヶ葉山南古墳群 2 次

新池南古墳

2014

九州歴史資料館

序

福岡県では、西日本高速道路株式会社の委託を受けて、平成 19 年度から東九州自動車道建設に伴う発掘調査を実施しています。本書は、福岡県東部の築上郡上毛町大字土佐井・下唐原に所在する遺跡群の発掘調査報告です。

この地区には神籠石式古代山城の一つである史跡唐原山城跡が所在し、当初はオープンカット工法で設計されていましたが、関係者の努力によりトンネル工法へ変更されて保存されることとなりました。その山麓の調査では幸いに高速道路予定地内に重要な関連遺構は所在しないことが確認されました。また、下唐原地区は築上郡で最も古墳が密集する地域で、穴ヶ葉山南古墳群・新池南古墳では新たな調査例を加えることとなりました。

本書が、地域のみならず広範に歴史資料として活用され、また教育・研究、文化財愛護思想の普及の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書作成にいたる間には、西日本高速道路株式会社および関係諸機関、上毛町・同教育委員会、そして地元有志の方々の御協力を得て、これを無事に終了することができました。深く感謝する次第です。

平成 26 年 3 月 31 日

九州歴史資料館
館長 荒巻 俊彦

例　言

1. 本書は、東九州自動車道建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県築上郡上毛町大字土佐井・下唐原に所在する遺跡群の発掘調査の記録である。東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第16集にある。
2. 発掘調査・報告書作製は、西日本高速道路株式会社九州支社中津工事事務所の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課・九州歴史資料館が実施した。

なお、調査・報告書作製に関して福岡県高速道路対策室、上毛町・同教育委員会の多大な御協力を得た。
3. 土佐井遺跡 2C-4 区は、東九州自動車道福中津工事事務所管内の第 39 地点、土佐井遺跡 2A-2 区は同 40 地点、土佐井小迫遺跡及び唐原山城跡は同 41 地点、穴ヶ葉山南古墳群は同 42 地点、新池南古墳は同 44 地点にある。
4. 本書に掲載した写真は、遺構は調査担当者が、遺物は九州歴史資料館整理指導員北岡伸一が撮影したものを使用した。

なお、空中写真は有限会社空中写真企画及び東亜航空技研株式会社に委託して、ラジコンヘリ等を使用して撮影したものである。
5. 本書に掲載した遺構図は、発掘作業員の補助を得て調査担当者が作成した。
6. 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において城門の指導の下で実施した。
7. 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
8. 本書に使用した地図は国土地理院発行の 1/50,000 地形図「中津」及び 1/25,000 地形図「土佐井」を改変したものである。
- また、使用する座標は世界測地系による。
9. 平成 23 年度から、福岡県教育庁総務部文化財保護課の埋蔵文化財発掘調査業務は、九州歴史資料館へ移管された。
10. 本書の執筆は各担当者が行い、編集は飛野が行った。

本文目次

	頁
I. はじめに (飛野)	1
1 発掘調査に至る経緯	1
2 調査の組織と関係者	4
II. 位置と環境 (飛野)	7
1 地理的環境	7
2 歴史的環境	7
III. 調査の内容	11
1 土佐井遺跡 2C-4 区 (飛野)	11
2 土佐井東遺跡 2A-2 区 (飛野)	15
3 土佐井小迫遺跡 (荻・飛野)	16
4 唐原山城跡 (吉村)	22
5 穴ヶ葉山南古墳群 2 次 (飛野)	27
6 新池南古墳 (荻・飛野)	51
IV. おわりに (飛野)	62

図版目次

土佐井遺跡 2C-4 区

- 図版 1 1. 全景（北西上空から）
2. 全景（上空から）
図版 2 1. A 区南西壁土層（東から）
2. B 区南端溝（北から）
3. C 区中央溝（北東から）

土佐井遺跡 2A-2 区

- 図版 3 1. 全景（北西上空から）
2. 全景（上空から）

土佐井小追遺跡

- 図版 4 1. 全景（西上空から）
2. 全景（上空から）
図版 5 1. I 区全景（上空から）
2. II 区全景（上空から）
図版 6 1. 中央 Tr. 南壁中央東寄り（北から）
2. 中央 Tr. 南壁中央（北から）
3. 中央 Tr. 南壁中央西寄り（北から）

唐原山城跡

- 図版 7 1. 唐原山城跡西坑口区遠景（西から）
2. 唐原山城跡西坑口区全景（東から）
3. 唐原山城跡西坑口区第 1 トレンチ（北西から）
図版 8 1. 唐原山城跡と東坑口区（南東から）
2. 唐原山城跡東坑口区第 1 トレンチ（南西から）
3. 唐原山城跡東坑口区第 2 トレンチ（北西から）

穴ヶ葉山南古墳群 2 次

- 図版 9 1. 全景（南東上空から）
2. 全景（上空から）
図版 10 1. 5・6 号墳現況（南西から）
2. 5 号墳現況（北西から）
3. 5 号墳主体部現況（北から）
図版 11 1. 5 号墳墳丘北東畦土層（南東から）
2. 5 号墳墳丘南西畦土層（南から）
3. 5 号墳墳丘南東畦土層（東から）
図版 12 1. 5 号墳主体部全景（北西から）
2. 5 号墳主体部内部（北西から）
3. 5 号墳主体部内部（南東から）
図版 13 1. 5 号墳主体部内部（北東から）
2. 5 号墳主体部勾玉出土状況（北東から）
3. 5 号墳主体部鉄製品出土状況（南東から）
図版 14 1. 5 号墳主体部石材転落状況（北東から）
2. 5 号墳閉塞と墓道土器出土状況（北西から）
3. 5 号墳墓道上器出土状況（南西から）
図版 15 1. 5 号墳墳丘北西部土器出土状況（北から）
2. 同（北から）
3. 5 号墳墳丘南西部土器出土状況（南西から）
図版 16 1. 6 号墳現況（北から）
2. 6 号墳北西畦土層（北から）
3. 6 号墳南東畦土層（南から）
図版 17 1. 6 号墳南西畦土層（南東から）
2. 6 号墳主体部閉塞状況（北東から）
3. 6 号墳主体部（北東から）
図版 18 1. 6 号墳墳丘北部土器出土状況（南西から）
2. 同（西から）
3. 同（北から）

新池南古墳

- | | | |
|-------|-----------------|------------------|
| 図版 19 | 1. 全景（南上空から） | 2. 天井石露出後（東上空から） |
| 図版 20 | 1. 現況（西から） | 2. 表土除去後（南から） |
| | 3. 天井石露出後（南東から） | |
| 図版 21 | 1. 主体部 1（南東から） | 2. 主体部 2（北西から） |
| | 3. 主体部 3（北西から） | |

出土遺物

- | | |
|-------|----------------------------|
| 図版 22 | 穴ヶ葉山南古墳群出土遺物 1 |
| 図版 23 | 穴ヶ葉山南古墳群出土遺物 2 |
| 図版 24 | 穴ヶ葉山南古墳群出土遺物 3 |
| 図版 25 | 穴ヶ葉山南古墳群出土遺物 4 |
| 図版 26 | 穴ヶ葉山南古墳群出土遺物 5 |
| 図版 27 | 穴ヶ葉山南古墳群出土遺物 6 |
| 図版 28 | 穴ヶ葉山南古墳群出土遺物 7・新池南古墳出土遺物 1 |
| 図版 29 | 新池南古墳出土遺物 2 |
| 図版 30 | 新池南古墳出土遺物 3 |

挿図目次

	頁
第 1 図 福岡県築上郡上毛町の位置	1
第 2 図 東九州自動車道中津工事事務所管内路線図及び調査地点位置図（1/100,000）	2
第 3 図 周辺遺跡分布地図（1/50,000）	6
土佐井遺跡 2C-4 区	
第 4 図 土佐井遺跡 2C-4 区遺構配置図（1/400）	11
第 5 図 土佐井遺跡調査位置図（1/2,500）	12
第 6 図 土佐井遺跡 2C-4 区溝土層実測図（1/60）	13
第 7 図 土佐井遺跡 2C-4 区出土遺物実測図（1/3）	14
土佐井遺跡 2A-2 区	
第 8 図 土佐井遺跡 2A-2 区遺構配置図（1/400）	14
土佐井小迫遺跡	
第 9 図 土佐井小迫遺跡・唐原山城跡調査位置図（1/5,000）	16
第 10 図 土佐井小迫遺跡遺構配置図 1（1/300）	18
第 11 図 土佐井小迫遺跡 1 区土層実測図（1/60）	20
第 12 図 土佐井小迫遺跡遺構配置図 2（1/300）	21
唐原山城跡	
第 13 図 唐原山城跡西坑口区地形測量図（1/400）	23
第 14 図 唐原山城跡東坑口区地形測量図・土層実測図（1/400・1/200）	24

穴ヶ葉山南古墳群 2 次

第 15 図	穴ヶ葉山南古墳群調査位置図 (1/2,500)	26
第 16 図	穴ヶ葉山南古墳群地形測量図 (1/400)	28
第 17 図	穴ヶ葉山南 5 号墳主体部実測図 (1/60)	折込
第 18 図	穴ヶ葉山南 5 号墳墳丘土層実測図 (1/80)	31
第 19 図	穴ヶ葉山南 5 号墳閉塞状態実測図 (1/60)	31
第 20 図	穴ヶ葉山南 5 号墳墓道遺物出土状態実測図 (1/30)	32
第 21 図	穴ヶ葉山南 5 号墳出土玉類実測図 (1/1・1/2)	33
第 22 図	穴ヶ葉山南 5・6 号墳出土金属製品等実測図 (2/3)	35
第 23 図	穴ヶ葉山南 5 号墳出土土器実測図 1 (1/3)	36
第 24 図	穴ヶ葉山南 5 号墳出土土器実測図 2 (1/3・1/4)	37
第 25 図	穴ヶ葉山南 5 号墳出土土器実測図 3 (1/3・1/4)	38
第 26 図	穴ヶ葉山南 5 号墳出土土器実測図 4 (1/3)	39
第 27 図	穴ヶ葉山南 5 号墳出土土器実測図 5 (1/3)	40
第 28 図	穴ヶ葉山南 5 号墳出土土器実測図 6 (1/3・1/4)	42
第 29 図	穴ヶ葉山南 5 号墳出土土器実測図 7 (1/3)	44
第 30 図	穴ヶ葉山南 6 号墳墳丘土層実測図 (1/80)	45
第 31 図	穴ヶ葉山南 6 号墳閉塞状態実測図 (1/60)	45
第 32 図	穴ヶ葉山南 6 号墳主体部実測図 (1/60)	46
第 33 図	穴ヶ葉山南 6 号墳出土土器実測図 1 (1/3)	47
第 34 図	穴ヶ葉山南 6 号墳出土土器実測図 2 (1/3)	48
新池南古墳		
第 35 図	新池南古墳調査位置図 (1/2,500)	50
第 36 図	新池南古墳地形測量図 (1/400)	51
第 37 図	新池南古墳墳丘土層実測図 (1/80)	52
第 38 図	新池南古墳主体部実測図 1 (1/60)	53
第 39 図	新池南古墳主体部実測図 2 (1/60)	54
第 40 図	新池南古墳出土玉類実測図 (2/3)	55
第 41 図	新池南古墳出土金属製品実測図 (2/3)	56
第 42 図	新池南古墳出土土器実測図 1 (1/3)	57
第 43 図	新池南古墳出土土器実測図 2 (1/3)	58
第 44 図	新池南古墳出土土器実測図 3 (1/3)	59

表目次

表 1	東九州自動車道中津工事事務所管内調査地点一覧	3
表 2	穴ヶ葉山南 5 号墳出土玉類計測表	34
表 3	新池南古墳出土玉類計測表	56

I はじめに

1 発掘調査に至る経緯

東九州自動車道は、福岡県北九州市小倉JCTで九州縦貫自動車道から分岐し、九州東部の主要都市を貫いて鹿児島市に至る全長436kmの高速道路である。福岡県内では、平成26年度までに全線を供用開始する計画で、急ピッチで工事がなされている。

福岡県内の建設工事は西日本高速道路株式会社九州支社が総括し、供用中の苅田北九州空港ICから旧日本道路公団が建設・管理した椎田道路（平成4年供用開始）に接続するまでの本線（L=16km）及び椎田道路に既設の築城・椎田両IC改築工事を同支社福岡工事事務所が、椎田道路から分岐して宇佐別府道路（大分県）に接続するまでの間（福岡県域L=15km）を同中津工事事務所が施工している。

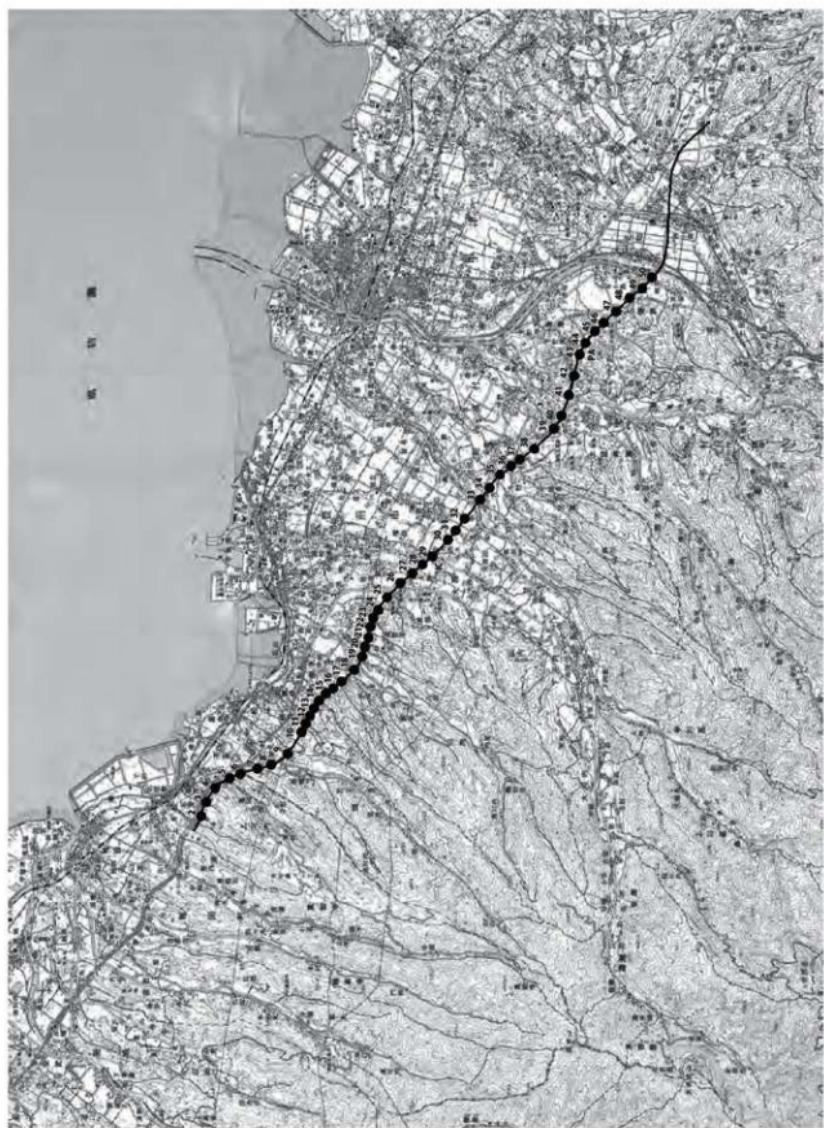
中津工事事務所が所管する路線は、築上町・豊前市西北部では幅の狭い丘陵・谷が連続する地形であるが、豊前市中央部付近から上毛町西部にかけては圃場整備事業が終了した水田部が多く、上毛町友枝川から東は再び小規模な丘陵地・谷が連続する地形となる。そのため、全体に小規模・内容希薄な調査地点が多く、調査を担当する側としては幸いであった。ただ、豊前ICが計画された豊前市塔田・大西・永久地区では思ってもいなかった環濠集落や主として弥生時代から古墳時代に至る竪穴住居跡が非常に高密度で検出されて、多くの新しい知見を得ることができた。

旧日本道路公団と異なって分割民営化された新しい体制下では、高速道路株式会社が建設に要したすべての債務を供用開始後1年で清算して日本高速道路保有・債務返済機構へ譲渡するため、それ以降、高速道路株式会社は整理作業に要する経費を負担できない。短期間で福岡県内の延長31kmの発掘調査を円滑に実施し、そして供用1年後までにすべての報告書作成事業を終えることは、福岡県教育庁総務部文化財保護課（当時）単独では実施が困難な事業規模である。このことを鑑みて、福岡県教育委員会は関係自治体の行橋市・豊前市・京都郡みやこ町・築上郡築上町・同郡上毛町に対して発掘調査への協力を依頼し、快諾された。その結果、事業施工に大きな影響を及ぼすこともなく、順調に経過している。報告書作成業も平成27年度までに終了する計画で進行中である。

なお、中津工事事務所管内では平成20年8月22日、上毛町安雲山田遺跡で発掘調査に着手して以降、用地取得に併せて表1に示した各地点で調査を実施してきた。関係市町の多大な協力を得て、平成25年度に現地調査はほぼ終了の運びとなった。



第1図 築上郡上毛町の位置



第2図 東九州自動車道中津工事事務所管内路線図及び調査地点位置図（1/100,000）

表1 東九州自動車道中津工事事務所管内調査地点一覧

地点	工事件名	遺跡名	所在地	対象面積 (m ²)	試掘年度	調査面積 (m ²)	調査年度	報告年度	既刊報告 書番号	備考
2 中津	石堂大石ヶ丸遺跡	篠上郡篠上町石堂		9027	H21~23	200	H23	H25	15集	
3 中津	福間妻切古墳群	篠上郡篠上町石堂		10644	H21~23	1000	H22	H25	15集	
4 中津	頭敷古墳群 西一木田遺跡	篠上郡篠上町上ノ河内		19420	H22					遺跡なし
5 中津		篠上郡篠上町上ノ河内		2840	H21					遺跡なし
6 中津	中村西峰尾遺跡	篠上郡篠上町上ノ河内・豊前市中村		26972	H22	15000	H23~24	H25	15集	
7 中津	中山山林遺跡	豊前市中村		16579	H21~22	700	H22	H25	15集	
8 中津		豊前市中村・荒堀		10354	H21					遺跡なし
9 中津		豊前市中村・松江		42434	H24					遺跡なし
10 中津		豊前市松江		9965	H23					遺跡なし
11 中津		豊前市松江		26579	H21~23					遺跡なし
12 中津	松江黒部遺跡	豊前市松江・四郎丸		14462	H21	600	H23	H25	15集	
13 中津		豊前市四郎丸		12986	H21~23					遺跡なし
14 中津		豊前市四郎丸		2390	H21					遺跡なし
15 中津		豊前市四郎丸		9735	H22					遺跡なし
16 中津		豊前市四郎丸		10432	H22					遺跡なし
17 中津	川内下野添遺跡	豊前市川内		15972	H21~23	3600	H22~23	H25	15集	
18 中津		豊前市川内		16040	H21~23					遺跡なし
19 中津	鳥越下屋敷遺跡	豊前市鳥越		4963	H23~24	760	H24			
20 中津		豊前市鳥越		8762	H23~24	1300	H24			
21 中津		豊前市大村		0						
22 中津		豊前市大村		0						
23 中津		豊前市大村		0						
24 中津	天地山遺跡	豊前市大村		6777	H20~22					遺跡なし
25 中津	大村上野地遺跡 大村上トキ田遺跡	豊前市大村・荒堀		16527	H20~22~23	2600	H23	H25	15集	一部豊前市により調査
26 中津	荒原山田原遺跡	豊前市荒原		21821	H21~24	1000	H22	H25	15集	
27 中津		豊前市荒原		9823	H21~22					遺跡なし
28 中津		豊前市大西		23122	H21~23					遺跡なし
29 中津	塔尾琵琶田遺跡 大西跡 西ノ原遺跡 時未遺跡	豊前市大西・永久・塔尾・久土路		63733	H21~24	35000	H23~25			一部豊前市により調査
30 中津	久路上馬踏遺跡	豊前市久路上		9463	H23					遺跡なし
31 中津	鬼木漢治遺跡	豊前市鬼木		12636	H23					遺跡なし
32 中津	鬼木立遺跡	豊前市鬼木		25256	H21~23	5500	H24			
33 中津	椿方古墳群 七ヶ枝遺跡 春屋敷遺跡 道ノ本遺跡	篠上郡上毛町椿方		12456	H20~23	3500	H20~22	H24	8集	上毛町試掘
34 中津	龍毛遺跡	篠上郡上毛町椿方		11732	H20~21~21	5000	H21~24	H24	8集	上毛町試掘
35 中津	下尻高遺跡	篠上郡上毛町椿方・尻高		11517	H20~21	7200	H20~21	H24	7集	
36 中津	ハラノ本遺跡	篠上郡上毛町安雲		10135	H20	9400	H20			一部上毛町により調査
37 中津	安雲山田遺跡	篠上郡上毛町安雲・宇野		24970	H20~21		H20~21	H24	7集	#
38 中津		篠上郡上毛町上佐井		22525	H20					
39 中津	土佐井遺跡 2C~4区	篠上郡上毛町土佐井		21860	H20~22	4400	H22~23	H25	16集(本番)	一部上毛町により調査
40 中津	土佐井遺跡 2A~2区	篠上郡上毛町土佐井		13476	H20~22	600	H23	H25	16集(本番)	#
41 中津	土佐井小道遺跡 唐原山城跡	篠上郡上毛町土佐井		7887	H21~22~24	1500	H22~24	H25	16集(本番)	
42 中津	ガサメキ古墳群 穴ヶ葉山南遺跡	篠上郡上毛町下唐原		33002	H21~22~24	4900	H22~24	H25	16集(本番)	一部上毛町により調査
43 中津		篠上郡上毛町下唐原		25215	H21~22~23					遺跡なし
44 中津	大久保横道遺跡 (新池南古墳)	篠上郡上毛町下唐原		13452	H22	7500	H22	H25	16集(本番)	一部上毛町により調査
45 中津		篠上郡上毛町下唐原		11997	H24					遺跡なし
46 中津	亂山古墳群	篠上郡上毛町下唐原・上唐原		23977	H22~24	12000	H23~24			
47 中津	四ノ塚山古墳群	篠上郡上毛町上唐原		7193	H22~23	6600	H23			
48 中津	鏡追古墳群	篠上郡上毛町上唐原		4577	H25	2000	H25			
49 中津	規町遺跡	篠上郡上毛町上唐原		14250	H24	8940	H24~25			
50 中津	桜町遺跡	篠上郡上毛町上唐原		4735	H23	1050	H24~25			一部上毛町により調査

2 調査の組織と関係者

本報告に掲載した各遺跡の発掘調査・報告書作成に至る間の西日本高速道路株式会社関係者は以下の通り。

西日本高速道路株式会社九州支社

	22年度	23年度	24年度	25年度
西日本高速道路株式会社九州支社				
支社長	久保晶紀 (~9.30) 本間清輔 (10.1~)	本間清輔	本間清輔	本間清輔
中津工事事務所長	上羽坪勲	上羽坪勲 (~6.30) 三瀬博敬 (7.1~)	三瀬博敬	三瀬博敬 (~6.30) 宗方鉄生 (7.1~)
副所長（技術担当）	大串久之 (~9.30) 森田忠敏 (10.16~)	森田忠敏 (~9.30) 小島二郎 (7.1~)	小島二郎	小島二郎
副所長（事務担当）	平松善司	中村重俊	中村重俊	中村重俊
総務課長	宇都良典	宇都良典	宇都良典	門田憲明
用地課長				岩田勲志 (7.1~)
用地第一課長	戸上政明	藤江 正	藤江 正	岩田勲志 (~6.30)
工務課長	田中 満 (~9.30) 渡邊浩延 (10.1~)	渡邊浩延	渡邊浩延 (~131)	本多正和 本多正和 (2.1~)
豊前工事長	桑野 修	川畑一弘	川畑一弘	川畑一弘
上毛工事長	當房周三	當房周三 (~6.30) 荒平裕次	荒平裕次	荒平裕次
		荒平裕次 (7.1~)		

同じく、福岡県教育委員会および九州歴史資料館の関係者は以下の通り。

	22年度	23年度	24年度	25年度
福岡県教育委員会				
総括				
教育長	杉光 誠	杉光 誠	杉光 誠	杉光 誠
教育次長	荒巻俊彦	荒巻俊彦	荒巻俊彦	城戸秀明
総務部長	今田義雄	今田義雄	西牟田龍治	西牟田龍治
文化財保護課長	平川昌弘	伊崎俊秋	伊崎俊秋	伊崎俊秋
同副課長	伊崎俊秋			
同参事	小池史哲 (課長技術補佐)			
課長補佐	日高公徳			
調査第一係長	吉村靖徳			
	22年度	23年度	24年度	25年度
参考補佐兼調査第二係長	飛野博文 (調査担当)			

臨時調査員	荻 幸二 (調査担当)
庶務	
管理係長	富永育夫
庶務担当	仲野洋輔
調査・報告書作製	
九州歴史資料館	
総括	
館長	西谷 正
副館長	南里正美
総務室長	圓城寺紀子
文化財調査室長	飛野博文 (担当)
文化財調査室長補佐	吉村靖徳 (担当)
文化財調査室調査班長	小川泰樹
主任技師	
臨時調査員	荻 幸二 (担当)
整理担当	
保存管理班長	加藤和歲
同参考補佐	池邊元明
技師	小林 啓



工事が進む東九州自動車道（唐原山城跡東坑口）



第3図 周辺遺跡分布地図 (1/50,000)

II 位置と環境

1 地理的環境

福岡県築上郡上毛町は県東端に位置し、北は同郡吉富町、西は豊前市、南及び東は大分県に接する。町南部は丘陵が発達して狹隘な谷が数条長く伸び、北部は現状でほぼ平坦な地形となっている。また、東部は一級河川山国川が北流してその東西に自然堤防・段丘を形成し、その上に多くの遺跡が知られている。平地に近い丘陵は多くが洪積台地で、風化安山岩を含む赤土からなるが、山国川上流方面の町内百留付近では凝灰岩の露出があって、横穴群（町史跡）が掘り込まれている。

2 歴史的環境

上毛町は新吉富村及び大平村が平成の大合併を経て成立した新しい町である。昭和61年(1986)に一般国道10号線豊前バイパス建設に伴う発掘調査が旧大平村上唐原地区で着手されて以降、同バイパスに関わる発掘調査は平成6年(1994)まで両村内で継続、相前後してこの地域でも圃場整備事業が本格的に開始されることとなり、両村ともに文化財担当技師を配置した。その後も各種の開発事業によって新しい知見が蓄積されてきたが、事業に伴う発掘調査が優先されて報告書の作成が後回しとなっていた。大合併以降は文化財技師の配置転換などもあって報告書の刊行がより困難となったが担当職員の努力により徐々に作成されつつある。以下では、既報告の遺跡を中心に地域の歴史を略述したい。

旧石器時代 遺物は山国川左岸の段丘上にある金居塚古墳群³¹から出土している。後期古墳下層、いわゆる旧地表と呼ばれる土層およびその下位の風化土層からのもので、時期は単一ではないものの、珪質岩製ナイフ形石器などが出土した。近接する下唐原十足遺跡(珪質頁岩製ナイフ形石器)、桑野遺跡(流紋岩ナイフ形石器)、上の熊遺跡(安山岩製剥片尖頭器)などでも二次的な状況での出土例があり、今後良好な遺跡が発見される可能性が高い地域といえる。

縄文時代 従来、福岡県東部地域では広く分布する早期押型文土器群が最古の縄文土器であったが、京都郡みやこ町(旧犀川町) 犀川上流域の伊良原ダム建設に先立つ調査でそれらを遡る土器群が初めて確認された。狹隘な谷の標高220mほどの地点、上伊良原櫻遺跡³²で発見された粘土瘤をもつ刺突文土器、柏原式土器である。まとまった量の出土は当地域で初めてであり、出土土地がダムが建設されるような「山奥」であることも驚きの一つである。

中期以前は散発的に遺物が出土するものの明確な生活の痕跡は確認できない。しかし、後期になると様相が一変する。上毛町内だけでも山国川左岸の原井三ッ江遺跡³³・上唐原遺跡³⁴、東友枝川右岸の東友枝曾根遺跡³⁵、同左岸の宇野代遺跡³⁶・垂水遺跡³⁷などが知られていて、広範囲にわたって大小の河川に近接して集落が営まれる状況が明らかとなってきた。しかも、いずれも土器・石器の量が非常に多い点で特徴的である。その後、晩期の遺跡はやはり希薄となる。

弥生時代 周防灘沿岸地域で最古の弥生土器は行橋市の海岸砂丘上の長井遺跡³⁸で採集された副葬用とされる小壺など、そして中世にも「津留の港」と呼ばれたという行橋市津留に隣接する辻垣地区³⁹から出土した板付I式土器群である。ただ、辻垣地区的遺跡では確実な住居跡や貯蔵穴といった遺構はなく、溝が主体であった。

山国川左岸では、下唐原地区の段丘上において前期後半から集落が営まれ、中期には同大塚本遺跡で墳丘墓が、野地川という小河川を挟んで北に続く垂水地区牛頭天王遺跡では大型掘立柱建物や環濠集落が営まれるに至った。墳丘墓は内法 14×16 m の長方形墳丘の四周に溝を巡らせるもので、内部は中央から偏して小児棺などが調査されたが、中心部付近は失われていた。圃場整備事業や工業団地造成に伴う調査などによって中期にはこの段丘上に広く集落が広がっていたことが判つていて、墳丘墓や環濠がその中心的な遺構であったものと思われる。小河川や浅い谷地形などを含むが、集落の規模は南北 1,200 m、東西 700 m ほどと推測される。後期になると南東側の低地に南北 500 m、東西 700 m ほどの規模に復元された大規模な環濠集落が想定されている。

古墳時代 そして低地の環濠が埋まる頃、集落西の段丘上に全長 30 m ほどと小規模な前方後円墳（能満寺古墳）が小方墳と群をして営まれ、続いて墳丘規模が倍となる西方古墳にいたるまで、少なくとも 2 世代の首長が存在したようである。山国川流域の前方後円墳は、確実にはこの 2 基だけで、5 世紀代に比定される吉富町櫛生山古墳もその可能性が指摘されている。しかし、5 世紀～6 世紀前半代の古墳は前方後円墳のみならず、円墳・方墳もほとんど知られていない。わずかに右岸の中津市幣旗邸古墳（方墳）およびその足下の斜面に掘り込まれた上ノ原横穴墓群の一部があるのみである。

反面、6 世紀後半代は爆発的な数で円墳が造られ、中には直径 40 m におよぶものも複数ある。この規模は、みやこ町橘塚・綾塚古墳（国史跡）など「豊國造」家の墓所といわれる古墳に匹敵するものであるが、当地域では大小数多くの古墳が群集している点で、独立した先の 2 古墳とは異なっている。また、古墳が築造された段丘の法面には横穴墓群が穿たれている。先の中津市上の原遺跡が斬新な調査法や古式の形態をもつことなどで著名であるが、上毛町側でも下唐原金居塚遺跡で群集墳と共存している。また、百留横穴群は凝灰岩の岩盤に穿たれ、赤色顔料を用いて円文を描いた例が知られていて、付近の段丘上には大小無数の古墳が立地する。

古代 古代の遺跡として大規模なものが 3 遺跡あり、優雅な新羅系軒瓦を出土する垂水庵寺が早くから知られている。国内最古の梵鐘といわれる太宰府觀世音寺梵鐘の口端部に「上三毛」の線刻があり、この寺院跡との関係が興味深いところである。この垂水庵寺に対しては、昭和 48 年度から実施した確認調査で主要遺構が不明瞭のまま、条里地割りに添う方 2 町の寺域が推測された。その後、南に隣接する南吉富小学校講堂の改築に伴う調査ではカマドに垂水庵寺から出土する新羅系瓦当を使用した竪穴住居跡や、条里と大きく方位の異なる磁北に近い方位をもつ大型掘立柱建物跡などを検出した。さらに、金堂推定地西側の調査では推定寺域に方位を揃える 2×2 間の掘立柱建物や、磁北に近い方位の溝から多くの瓦を出土するなどしている。このように新しい知見が得られているものの、推定寺域全体から見れば調査面積はごくわずかであり、遺跡保存のためにも早急に継続的な調査が強く望まれる。なお、供給瓦窯もいくつかが調査されている。

平成平成 7 年度から開始された大ノ瀬地区の圃場整備事業によって郡衙政府と思われる大規模な遺跡が確認され、国史跡として保存された。遺跡は推定されていた古代官道に接して、150 m 四方を部分的に柵列で囲み、内部にほぼ 55 m 四方の内郭をやはり柵列で囲んでいた。中心部は 5×2 間四面庇の正殿、 12×2 間の脇殿からなる。正殿はほぼ位置・方位を同じくして建て替えがなされ、脇殿は大きく方位を違えて建て替えがなされる。郡衙政府内を完掘した遺跡として特筆され、数多く確認された掘立柱建物跡群に対する検討が必要である。また、官道を挟んで 49×37 m の柵列で囲んだ区画があるが、記録にないものの郡衙付属の駅家の可能性も考えられる。旧新吉富村内では、大ノ瀬官衙遺跡に先行する官衙的建物配置をもつフルトノ遺跡や 2 棟の倉庫か

らなる岡遺跡などが調査されていて、それらの関連性も今後の検討課題として残る。

地権者の通報から始まった神籠石系の唐原山城跡³³の調査は平成11～16年にかけて実施された。友枝川右岸の丘陵先端部付近を東西500m、南北600mの規模で地形に沿って復元されたが、列石は余り残っていない。礎石建物が発見されたものの、遺構の性格上同時性の確認は困難が伴う。土塁も部分的に確認されただけで、果たして完成されたものか疑念がある。黒田如水が豊前六郡の国主として封じられ、天正15年(1587)に築城した中津城石垣にここから運ばれたと思われる石材が使用されており、その際に破壊されたようである。なお、東九州自動車道の路線発表と神籠石確認がほぼ同時期であったが、トンネル構造へ計画変更して保存されることとなった。

今一つ、先の牛頭天王遺跡の南に今となっては幻の遺跡があり、採集された瓦が紹介されている³⁴。礎石建物があったという目撲談があるが、今は遺跡の上には自動車関連の工場が建っている。

古代の歴史的課題として、条里制地割の施工時期の問題がある。圃場整備施工以前、上毛町(旧新吉富村)宇野・垂水地区は古代官道に方位を揃えて条里地割が良好に残存するといわれていた。しかし、国道バイパス建設などに伴う大規模な調査でそれに関連する遺構は明らかでなく、また、12～13世紀の遺物を含む不整形の大規模な浅い落ち込みが正ノ坪遺跡³⁵などで見られた。豊前市三毛門放生田遺跡³⁶や同小石原泉遺跡³⁷でも同じ頃の居館(屋敷)が官道に方位を揃えて現水田下で発見されていることなどを考えれば、地割そのものは官道に規制されたといえようが、現在のよう水田化した時期は中世以降のことと考えられる。

今回報告する土佐井地区の遺跡では遺構・遺物に乏しかったが、過去に周辺で調査・報告が行われた遺跡を紹介しておく。唐原山城跡の一部を横切る町道が友枝川と交わる付近の南、友枝川左岸に接して土佐井遺跡³⁸が調査され、5軒の竪穴住居跡や早期から晩期に至る種々の縄文土器・石器や後期古墳9基が調査された。住居跡は縄文時代後期のものであるという。この調査地点は東九州自動車道が友枝川をまたぐすぐ南に近接するが、路線内では試掘調査の結果遺跡は検出されなかつた。当時の状況を調べてみると、町道を境に北側は地形が大きく落ちていたようである。また、東九州自動車道の路線から200～300m南に位置する土佐井ミソンド³⁹遺跡では弥生中期の円形竪穴住居跡1軒や貯蔵穴、古代の竪穴住居跡1軒・掘立柱建物跡や溝、中世前期の掘立柱建物跡や墓地など多彩な遺構・遺物が調査されたが、密度は概して薄い。

註

1. 福岡県教育委員会「金居塚遺跡Ⅱ」(『一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第7集、1997)
2. 大平村教育委員会「下唐原十足遺跡」(『大平村文化財調査報告書』第12集、2002)
3. 福岡県教育委員会「桑野遺跡・上の熊遺跡・小松原遺跡」(『一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第6集下巻、1997)
4. 註3に同じ。
5. 福岡県教育委員会「伊良原Ⅱ上巻 上伊良原原遺跡 上高屋台ノ原遺跡」(『福岡県文化財調査報告』第229集、2011)
6. 大平村教育委員会「原井三ヶ江遺跡」(『大平村文化財調査報告書』第5集、1990)
7. 福岡県教育委員会「上唐原遺跡Ⅱ」(『一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第5集、1996)
8. 小池史哲・末永浩一「大平村東友枝曾根遺跡の調査」(『考古学ジャーナル』第443号、1999)
9. 福岡県教育委員会「宇野代遺跡」(『一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集、1995)
10. 渡辺正気「福岡県築上郡新吉富村垂水遺跡調査報告」(『古文化談叢』第11集、1983)

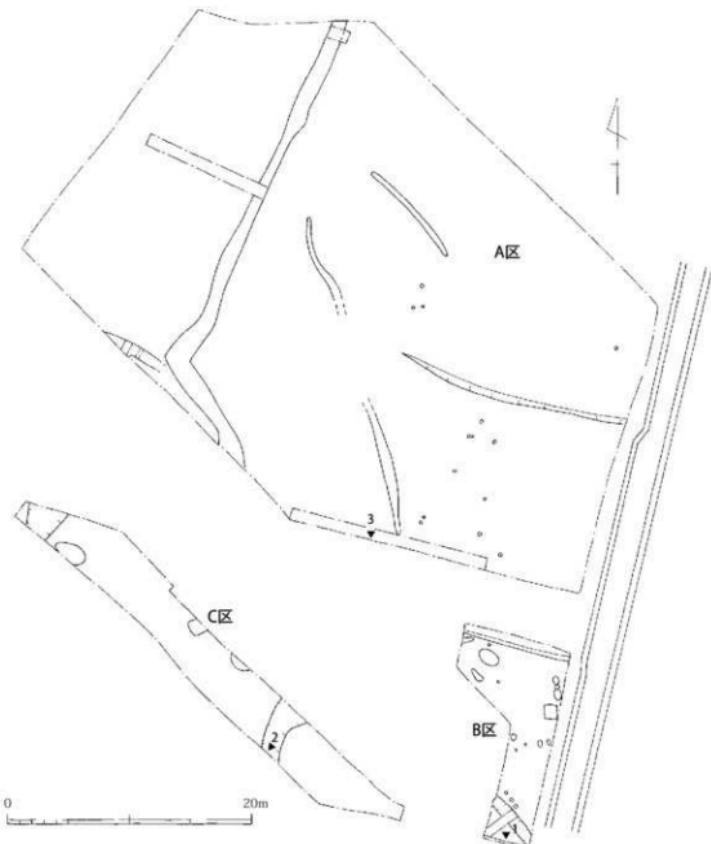
11. 定村貴二・小田富士雄「福岡県長井遺跡の弥生土器」(『九州考古学』25・26号、1965)
12. 福岡県教育委員会「辻垣ヲサマル遺跡」(『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』第1集、1993)
13. 福岡県教育委員会「大塚本遺跡」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第9集、1998)
14. 新吉富村教育委員会「牛頭天王遺跡 垂水高木遺跡」(『新吉富村文化財調査報告書』第8集、1994)
15. 福岡県教育委員会「郷ヶ原遺跡」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第10集、1998)
上毛町教育委員会「下唐原伊柳遺跡II(遺構編) 下唐原兩色遺跡」(『上毛町文化財調査報告書』第7集、2008)
上毛町教育委員会「下唐原伊柳遺跡II(遺物編) 下唐原石堂遺跡 下唐原桑野遺跡」(『上毛町文化財調査報告書』第9集、2009)など
16. 大平村教育委員会「能満寺古墳群」(『大平村文化財調査報告書』第9集、1994)
17. 福岡県教育委員会「金居塚遺跡I」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4集、1996)
18. 吉富町教育委員会「榆生山古墳」(『吉富町文化財調査報告書』第3集、1991)
19. 中津市教育委員会「幣旗邸古墳」(『中津市文化財調査報告書』第4集、1984)
20. 大分県教育委員会「上ノ原横穴墓群I~III」(『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財調査報告(2)~(4)』、1989~91)
21. 井上信隆「綾塚古墳」(『勝山町史』上巻、2006)
22. 井上信隆「橘塚古墳」(『勝山町史』上巻、2006)
23. 註17に同じ。
24. 上毛町教育委員会「百留横穴墓群」(『上毛町文化財調査報告書』第13集、2010)
25. 新吉富村教育委員会「垂水庵寺」(『新吉富村文化財調査報告書』第2集、1976)
26. 註14に同じ。
27. 新吉富村教育委員会「垂水庵寺II 宇野地区遺跡群I」(『新吉富村文化財調査報告書』第12集、1999)
28. 森田勉「垂水庵寺」「友枝瓦窯跡・山田窯跡」(『九州古瓦図録』九州歴史資料館編、1981)に触れられている。
その後の新しい発見として次の遺跡がある。
新吉富村教育委員会「照日遺跡群」(『新吉富村文化財調査報告書』第9集、1995)
29. 新吉富村教育委員会「大ノ瀬下大坪遺跡」(『新吉富村文化財調査報告書』第10集、1997) 新吉富村教育委員会「大ノ瀬下大坪遺跡II」(『新吉富村文化財調査報告書』第11集、1998)
30. 大平村教育委員会「唐原神龍石I」(『大平村文化財調査報告書』第13集、2003)
大平村教育委員会「唐原神龍石II」(『大平村文化財調査報告書』第16集、2005)
31. 村上久和・吉田寛・宮本工「豊前ににおける初期瓦の一様相一大分県中津市伊藤田窯跡群で生産された初期瓦一」(『古文化談叢』第18集、1987)
32. 註27に同じ。
33. 福岡県教育委員会「三毛門放生田遺跡」(『福岡県文化財調査報告書』第121集、1995)
34. 豊前市教育委員会「小石原泉遺跡」(『豊前市文化財調査報告書』第11集、1998)
35. 大平村教育委員会「土佐井地区遺跡」(『大平村文化財調査報告書』第6集、1990)
36. 大平村教育委員会「土佐井ミソンデ遺跡 穴ヶ葉山4号墳 穴ヶ葉山墳墓群」(『大平村文化財調査報告書』第7集、1991)

III 調査の内容

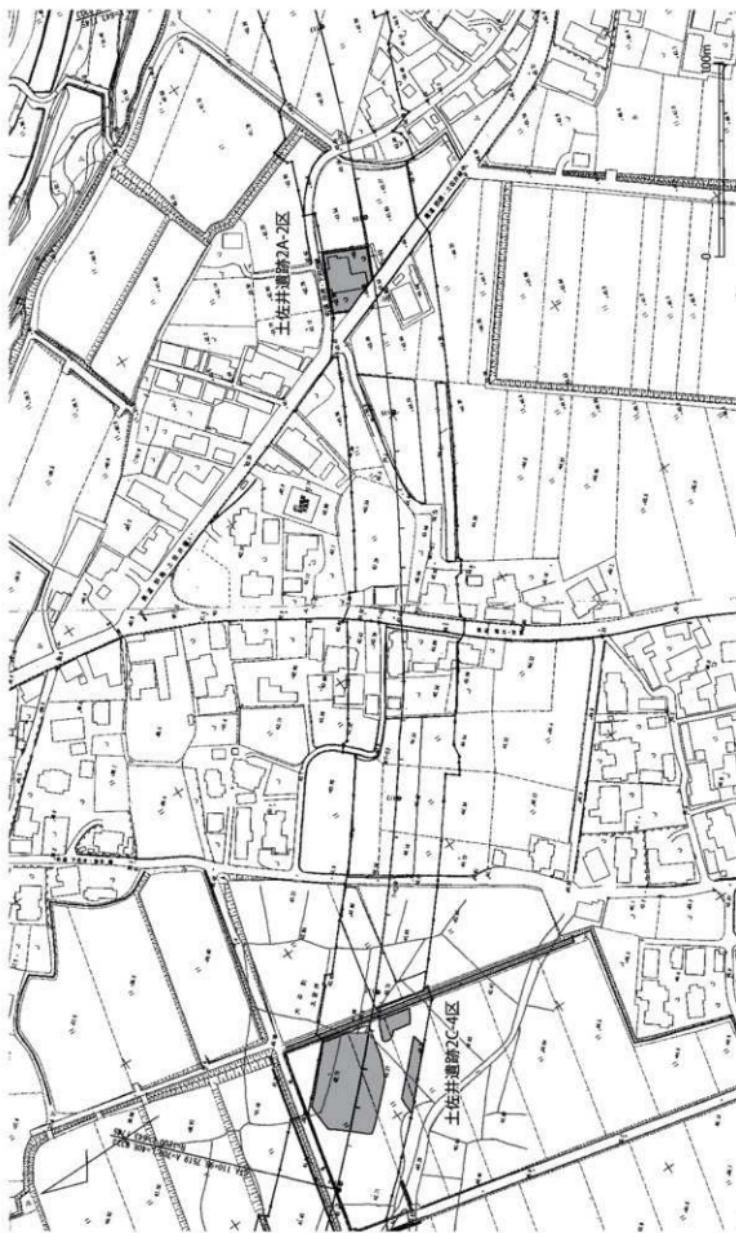
1 土佐井遺跡 2C - 4 区

1) 発掘調査に至る経緯

平成 22 年度、夏から冬にかけて上毛町穴ヶ葉山南古墳群・ガサメキ古墳群 2 区の調査を担当していた班が、23 年 1 月末日をもって両古墳群の調査を終了する見込みとなった。調査計画では、引き続いだ中津工事事務所管内第 46 地点（皿山古墳群）に移動する予定で、相応の予算を確保していた。ところが、中津工事事務所から地元調整が完了していないために第 46 地点の調査着手は



第 4 図 土佐井遺跡 2C-4 区遺構配置図 (1/400)



第5図 土佐井遺跡調査位置図 (1/2,500)

不可能という連絡を受けた。急速、上毛町教育委員会と協議を行い、町教委が次に調査に着手する予定で表土掘削を終了していた第39地点の調査を行うこととし、23年2月2日～同3月25日にかけて実施した。なお、本遺跡は調査時には「土佐井西遺跡」と呼称していたが、本報告にあたって町教委が実施した周辺の発掘調査区と区別するために名称を変更した。

また、範囲は暫定供用（2車線）に要する本線部分、農業用水路ボックス工事範囲および本線南側に設置される水路部分で、実際の調査面積は約1,600m²であった。

2) 遺構と遺物（図版1・2、第4・6・7図）

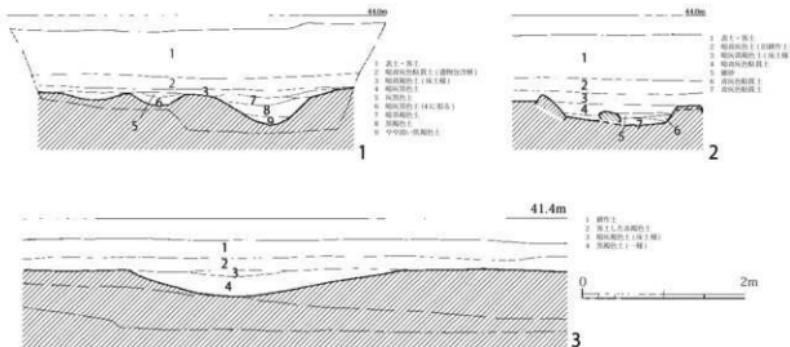
この調査対象地は、既に圃場整備が施工された水田で、3枚の水田にまたがっている。現状の標高は南から43.7～42.7mと北へ向かって徐々に低くなり、調査区北を走る農道のさらに北側は標高41.5mでさらに落ちていた。

調査区を便宜的にA区（本線部分）、B区（水路ボックス部分）、C区（南側水路部分）と分けて説明を加える。

A区 最も広い面積を有する部分である。この地区では南東部の標高が最も高くなっている。北西へ向かって緩やかに下降していく。また、東側および南西隅付近では赤褐色に近い地山土であるが、その間は黒色系の地山土が南東～北西方向に広がって、風化礫が露出する石原状となっている。本来的に小規模な谷状の落ち込みがあったようである。南西壁で作成した土層図を第6図3に示した。黒色系地山土の上方に幅3.4m、深さ0.3mほどの浅い落ち込みが見られ、埋土はほぼ一様な黒褐色土で壁面では遺物も見られなかった。石原状の部分を清掃する際に古墳時代と思われる須恵器腹片などが若干出土、南壁にトレンチをあける際に弥生中期と思われる甕底部片1点や古墳時代以降の土器小片が出土している。

遺構としては南東部の高い部分で若干の柱穴を検出したが、建物跡等を構成するものは見られない。西側では屈曲して調査区を南北に横断する幅1m、深さ0.2mほどの溝を確認した。礫を多く含む灰褐色土を埋土とし、出土遺物はなかった。

B区 ここも不整形の落ち込みなどがあったが、確実な遺構としては南端で検出した溝だけである。溝は3条あって、東側から順次幅・深さを記すと、0.8m・0.1m、0.6m・0.15m、1.5m・0.8mとなる。このうち、最も規模が大きな西端の溝がA区南西壁で確認した溝状の落ち込みと同一で



第6図 土佐井遺跡 2C-4区溝土層実測図 (1/60)

ある可能性がある。これらの溝に伴う出土遺物はない。

C区 ここも確実な遺構は中央東寄りで検出した幅1.5mほど、深さ0.2mほどの溝だけである。埋土は床面および中位付近に白色砂が堆積、その間および上面に青灰色粘質土が入っていた。この溝からは弥生土器あるいは土師器かと思われる土器体部片が2点出土しているが、時期等はわからない。

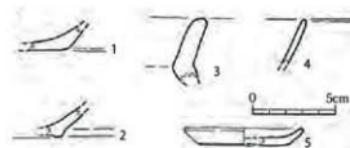
出土遺物 1・2はC区の地山上に堆積した暗灰黄褐色土から出土した。1は土師器皿の底部片で、器表が荒れている。2は形変化した高台をもつ瓦器椀の底部片。胎土精良で灰白色となるが、これも摩滅する。3～5はB区で検出した溝を覆つて堆積した暗青灰色土からの出土である。今回の出土遺物は大部分がこの層からのものであるが、いずれも細片化した須恵器・土師器で図示に堪え

るものは少ない。3は弥生終末期頃の甕であろう。胎土は非常に粗く、頸部に突帯を付す。4は口縁部付近の外側から内側にかけて灰黒色、その他の外側が灰白色となる瓦器椀の小片。これも器表が荒れている。5は土師器皿であるが、全体に灰黒色となる。復元口径7.3cm、器高1.1cmほどの大ささである。

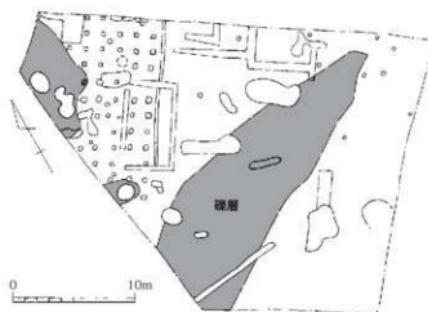
3) 小 結

この調査では数条の溝と若干の柱穴を検出したが、柱穴は建物跡などを構成するものではなかった。限定協議対称として調査を行わなかった部分があって、A～C区それぞれで検出した溝がどのような関係にあるか、確認できないままである。

圃場整備前の旧地形図を重ねてみると、C区で検出した溝は旧畦畔に沿うもののように水路の痕跡であろう（第5図）。A区の中にも畦畔が見られるが、それを襲うような痕跡ではなく、調査区内を略南北に横切る溝の性格を窺うことはできない。圃場整備前の水田区画が形成される以前に使用された遺構である可能性が考えられる。



第7図 土佐井遺跡 2C-4 区出土遺物
実測図 (1/3)



第8図 土佐井遺跡 2A-2 区遺構配置図 (1/400)

2 土佐井遺跡 2A-2 区

1) 発掘調査に至る経緯

第39地点（土佐井遺跡 2C-4 区、調査時は土佐井西遺跡と呼称。）の調査を終了した翌年度、やはり町教委が調査する予定で既に表土掘削を行っていた第40地点（土佐井遺跡 2A-2 区、調査時は土佐井東遺跡と呼称。）について、表土掘削後の判断から数日で終了するだろうということで、これについても県教委で対応することとした。調査は平成23年4月19日に着手、埋め戻し作業が遅れたことから同5月31日にすべてを終了した。調査面積は約600m²。

2) 遺構と遺物（図版3、第8図）

調査対象地は西端部、家屋が建てられていた部分が最高所となっていて、東へ向かって緩やかに降っていく。地山は黄褐色土で、調査区北西端および中程で東西方向に礫層が露出している。

その最高所付近には一辺長0.3～0.5m、深さ0.1m前後の方形柱穴が芯々で1.3～1.4mの間隔をもって4×10間分が整然と並んでいた。北東部は調査区外へ続くようで、その場合は屋敷地と町道境界まで3.5mを残していて、さらに1、2間分伸びる可能性がある。南西部もさらに1間分伸びていたかも知れない。この柱穴群の0.5m南東側には平行して0.1mの段が削り出されている。それを切ってコンクリート製の井戸枠や家屋の基礎が掘削されていた。出土遺物は皆無といつてよいが、これらの柱穴列は現家屋以前の家屋の遺構（床を支える束柱）であると思われる。

遺構配置図で不整形の落ち込みはいわゆる風倒木痕で、これも一部を発掘したが出土遺物はなかった。

調査区南西部で図示した溝状遺構を含めて、風倒木痕以外はすべて近現代の落ち込みである。
近現代以前の出土遺物はない。

3) 小 結

調査区北側の地山は安定した黄褐色土であった。調査区内で1mほどの比高差があつて、通常の遺跡であれば南東側の低い部分に遺物包含層が形成されてもよい状況であるが包含層はみられず、本来的に遺跡の密度が低かったようである。本遺跡の東側300mの付近、友枝川左岸の土佐井遺跡（1区）では縄文後期の集落や後期古墳群が調査されているが、今回の東九州自動車道に先立つ発掘調査では中世以前の遺構はほとんど皆無であった。開墾で失われたものというよりは、本来的に人々の居住に向かない地形・地質であったのだろう。

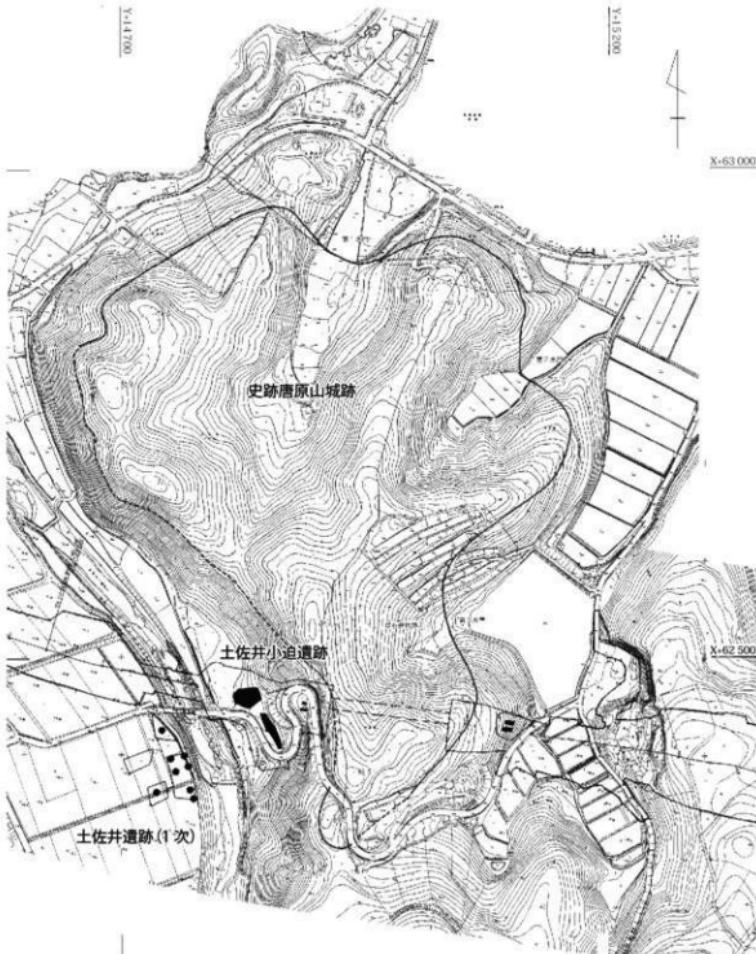
付記

土佐井地区では昭和63年度に友枝川左岸で「土佐井遺跡」を調査している（第9図）。また、平成2年度にも土佐井ミソンド遺跡（第3図参照）を調査し、両遺跡の報告書が刊行されている。本書では「土佐井遺跡」第2次調査の意で、東九州自動車道建設予定地内の遺跡名を「土佐井遺跡2」とし、県道を境として東から順に2A～2C区とした。さらにその中を町教委・県教委がそれぞれ調査を行っていることから細分し、標記の遺跡名とした。

3 土佐井小迫遺跡

1) 発掘調査に至る経緯

史跡唐原山城跡は以前からその存在に関する話が地元に伝わっていた。平成10年秋に土地所有者から大平村教育委員会（現上毛町教育委員会）に切石列が存在するとの連絡があり、村教育委員会が踏査を実施した結果、その存在が確認されることとなった。その後、翌平成11年の11月



第9図 土佐井小迫遺跡・唐原山城跡調査位置図（1/5,000）

から 12 月にかけて再踏査された際に神籠石式山城特有の上部に切り込みを持つ石列などの存在が明らかとなり、神籠石式山城であることが確定した。ところが、再踏査結果を受けて記者発表を行う直前の平成 11 年 12 月 1 日に至り、建設省（現国土交通省）から東九州自動車道計画路線の告示が行われた。事業者は西日本高速道路株式会社で、路線は唐原山城跡の南端付近の丘陵を横断する計画であったため、県文化財保護課は関係部署と遺跡保存に関する協議を重ねた。そして、平成 13 年 11 月 12 日の協議の場で、トンネルへの工法変更で遺跡が保存可能であること、その場合には工事に支障が生じないようトンネル出入口について指定範囲から除外することが、文化庁文化財部記念物課・福岡県教育庁総務部文化財保護課・国土交通省九州地方整備局企画部広域計画課・福岡県土木部（現県土整備部）高速道路対策室の 4 者で確認された。このような東九州自動車道建設に起因する保存に向けた動きの一方で、唐原山城跡全体の保存・活用を図るために範囲・内容の確認調査を継続し、併せて史跡指定に向けて関係機関で協議・調整を重ね、平成 17 年 3 月 2 日に国指定史跡「唐原山城跡」として官報告示されるに至った。

この調査地点は友枝川と史跡唐原山城跡の間の狭い平坦地・傾斜地で、地目は山林である。平成 21 年 8 月 27 日に実施した試掘調査で溝状遺構を確認したため、同 22 年 8 月 10 日から 11 月 29 にかけて本調査を実施した。

今回の発掘調査では「土木構築物（版築状の積み土）」とそれに伴う「柱穴」、大規模な「掘立柱建物跡」を検出したということで、唐原山城跡と関連して調査員の間で話題となった。調査担当者の見解は以下の記述に譲るが、編者は版築の明確な立ち上がりが認められず、担当者がこれに伴うという「柱穴」が現地形に沿っていること、またこの地に土壘状の構造物を造営する必要性を認めがたいなどの理由から単なる自然堆積であるとの立場である。現地形は町道建設（友枝川に架かる橋には「昭和 60 年 10 月完成」のプレートが付されている。）に際して山腹に盛土を行った結果のものであることが明らかで、それに沿って配置された「遺構」が古代のものではあり得ないし、現地で「柱穴」として説明を受けたものが果たして「遺構」であろうかとの疑念を当時から抱いている。また、現地確認を行った林重徳佐賀大学名誉教授（地盤工学）は、分層された層中の粒度がそれぞれ均質であることから自然堆積である可能性が高いと示唆された。総柱の巨大な「掘立柱建物跡」については、その後調査担当者が植木穴であったと撤回した。

本報告にあたっては、基本的に調査担当者が作成した原稿（「」で引用）を使用しているが、構成を変更し、明らかな誤字・脱字を修正し、挿図も一部変更している。

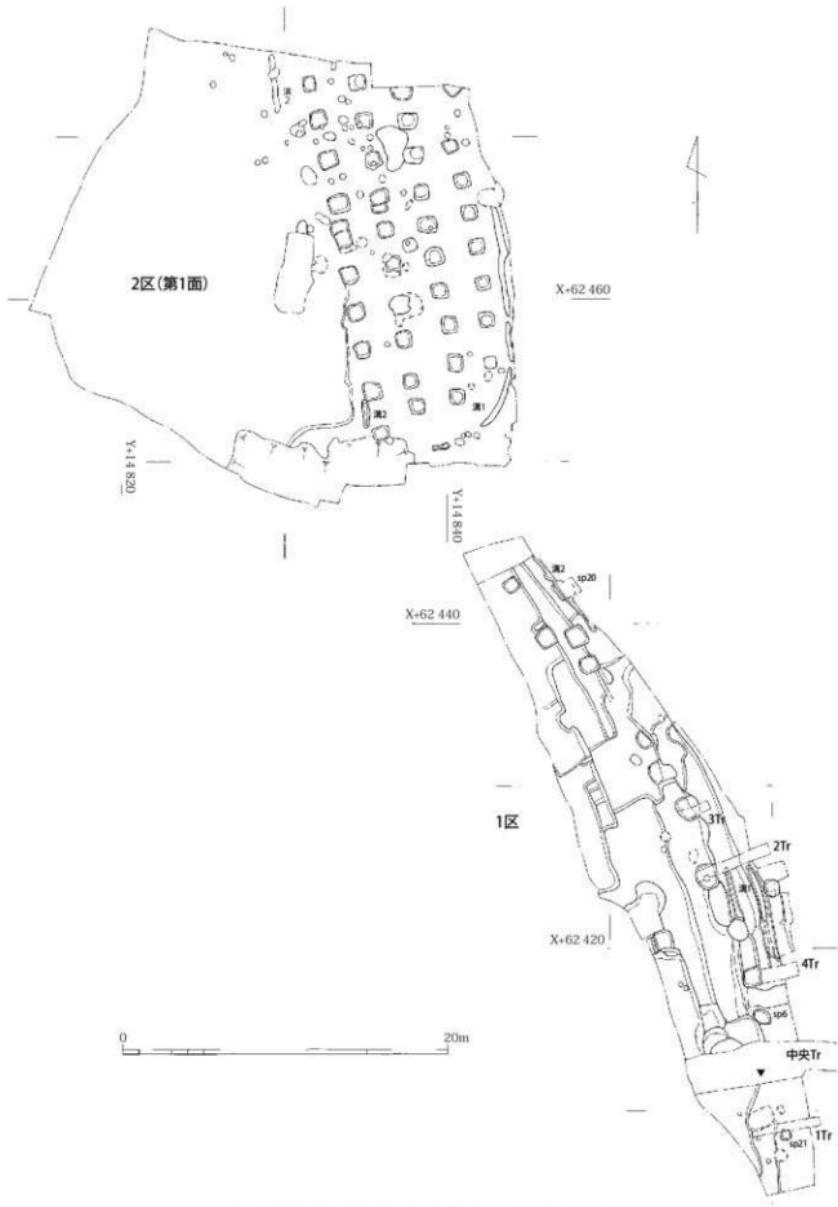
2) 遺構と遺物（図版 4 ~ 6、第 10 ~ 12 図）

調査対象地の中ほどに水路が設置されているため、その南側を 1 区、北側を 2 区とする。

1) 1 区の調査

「土木構築物」 調査区南端近くに開けたトレーナー南壁ほかの土層を図示している（第 11 図）。担当者は網掛けた部分が「版築」であるとして以下のように記述する。

「自然層より締まって薄い水平堆積の部分が、自然層を断ち切るように認められた。また、その中央部分の上端には更によく締まって薄い層のまとまりが水平堆積を斜めに断ち切るように看



第10図 土佐井小迫遺跡遺構配置図 1 (1/300)

取された。そのいずれもが自然の堆積としては不自然で、何らかの土木構築物の残存物と考えられる。最も近いものは、本遺跡の後背部に存在する唐原古代山城の盛土の上に築かれた土塁の版築土だが、土塁の立ち上がり部分が観察されず、同列には到底扱えないと推察される。

範囲的には、第2～4トレンチの土層断面でも観察され、版築土部分は、大型方形柱穴を西端として、それに沿うよう南北方向に、調査区の全域に広がっているようである。時期的には、表土剥ぎ後に検出面で出土した遺物から、古代から中世の間に収まると考えられる。」

「大型方形柱穴」「地形に沿うように配置された柱穴列を検出したとして、以下のように記述されている。

「一辺の長さは、0.95～1.25mを中心とする一群と、0.75～0.85mを中心とする一群の2種類が認められるが、前者の方が10:3で圧倒的に多く、主体をなすのは前者である。深さは、表土剥ぎによって上部は削平したのか、いずれも浅く、0.5m以上のものは2基しかない。また、13基のすべてが柱痕らしき土層を中央部に有している。隣接する柱穴との中心間の距離は、2.0～3.0mのものと4.0～4.9mのものの2種が看取され、SP21・6間は7.4mを測るが、前・後者のものを足したものにほぼ等しく、間にあるトレンチによって破壊されたと推測される。」

柵列状の構造が推測されるが、全体としてどのような構造をしていたか判然としない。しかし、土木構築物の版築土と併行することから一体の構造をなしていたと推測される。

所属時期については中世の所産である第2号溝状遺構にSP20が切られているので、中世以前といえる。」

第2号溝状遺構 「長さ6.4mを有し、調査区北東端にあって、北西～南東方向を示す。北西端は現代の水路を作るときに破壊されているが、本来はもっと伸びていたと推測される。現況で長さ6.4mを有し、東岸は調査区外にあるため不明で、最大深22cmを測る。出土した土器片から中世の所産だと考えられ、構造の類似から第1号溝状遺構も同様の時期に属すると考えられる」なお、「第1号溝状遺構」についての記述はない。

出土遺物 「本調査区からは、古代の須恵器胴部と、中世の土師器や瓦質土器の小破片が僅かに出土したのみである。」

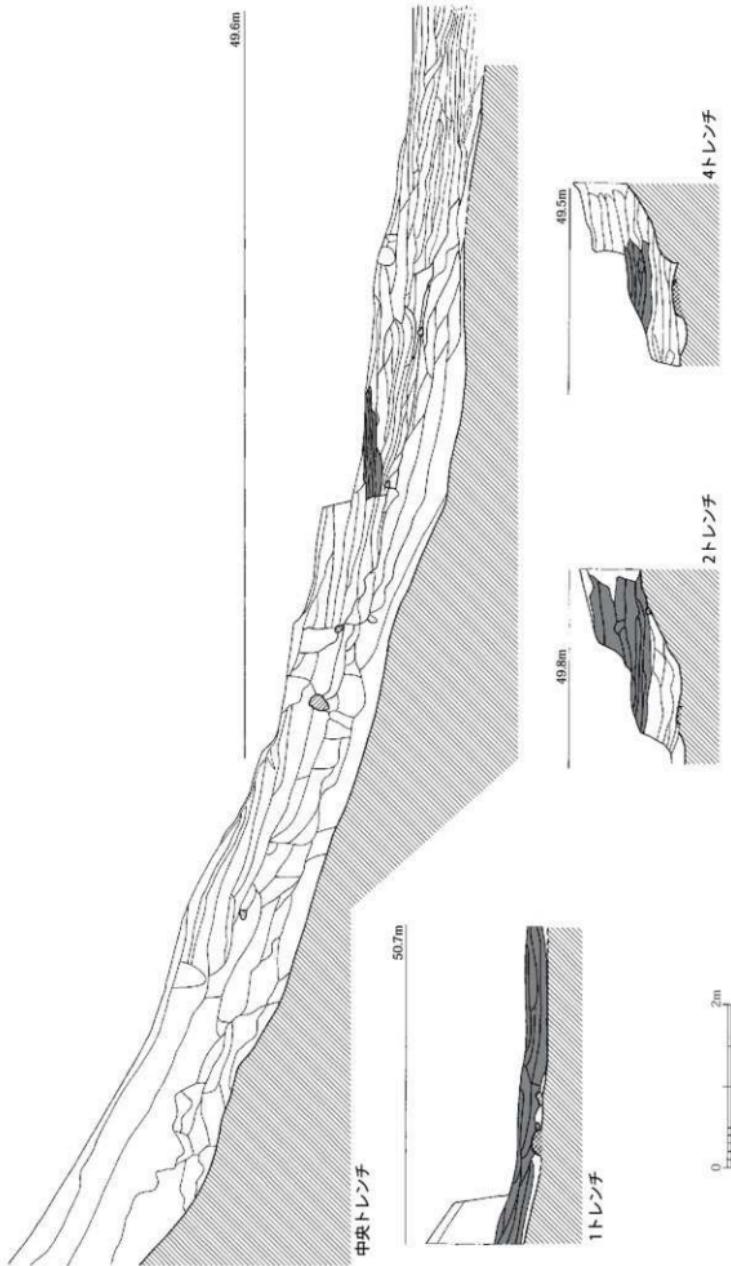
ii) 2区の調査

北側の調査区である。表土除去後の黄褐色土（第1面）、及び基盤となる赤褐色土（第2面）の2面からなるので、それぞれ説明を加える。

第1面

「大型方形柱穴」「38基が検出されており、ほぼ南北方向に4列並んで認められる。しかし、掘立柱建物跡などの整然とした並び方ではなく、やや蛇行したものとなっている。また、数基の土層断面を切ってみたが、柱痕が認められるものは全くなく、自然な埋没状況を示すものであった。また、出土した遺物から近代以降の所産であることが判明した。地元の住民からの聞き取り調査などから、近代に植えられた桑などの栽培植物を植える際の穴の痕跡ではないかと推測される。」

溝状遺構 第1号溝状遺構は植木穴群に近接して、その南東から南にかけて、途切れがちに連続する。最大幅0.75m、最大深0.4mの規模で、「上層に（暗）赤褐色土、下位に（暗）褐色土系の埋土をもち、全体に締まっていてヒゲ根を多く含む」との注記がある。帰属時期に触れられていないが、その位置から見て、編者はこれは植木穴のための排水溝ではなかろうかと考え



第111図 土佐牛小泊遺跡1区土層実測図 (1/60)

ている。第2・3号溝状遺構とするものは、植木穴群の西北及び西南に位置する小溝である。これらについては埋土の情報がなく、出土遺物もないようである。

第2面

調査担当者の報告では長軸1m前後、深さ0.3m前後の不整形といつてよい「土坑」5基が個別に図示されているほか、柱穴・小溝が遺構配置図に示されているが、特記すべきような内容はない。遺構に伴う出土遺物はな

いようで、図示されてい

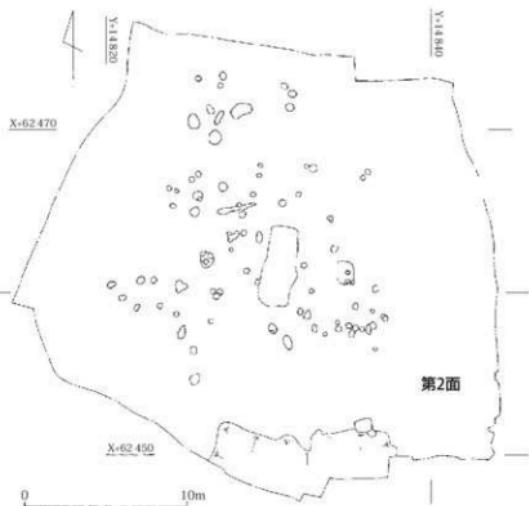
たものは「第2面」出土の弥生時代中期に属する甕底部、安山岩製「打製石庖丁」(刃部は認められない)、姫島産黒曜石製の石核である。

3) 小 結

「土木構築物及び大型方形柱穴 東西に縦断する中央トレンチ及び第1～4小トレンチの土層断面から、緩斜面部分より若干東側の急斜面にかかる区域から、緩斜面部分西端まで、自然層をカットした後、そこに盛土がされ、更にそれを切るように盛土範囲の中央に当たる部分に版築土が観察された。版築土の斜面の下の方に立ち上がりが認められないため、土壘的な構造をもつとは考えられないが、急斜面と緩斜面の結節部分に構築され、また、ほぼ同様の位置に、柱痕状の土層をもつ、南北に傾斜に沿って並ぶ一列以上の大型方形柱穴が13基検出されており、何らかの土木構築物であると推察される。

また、土木構築物の範囲だが、1区の急斜面から緩斜面結節部から緩斜面全域に及ぶだけでなく、2区の急斜面部末端にも同様の土層が観察されており、1・2区の調査区を越え、傾斜に沿って南北に伸びる可能性が高い。」

編者の所見については3-1)に既述した。



第12図 土佐井小迫遺跡遺構配置図2(1/300)

4 唐原山城跡

1) 発掘調査に至る経緯と既往の調査

東九州自動車道唐原トンネルの着工が迫った平成 24 年 2 月 24 日、九州歴史資料館・上毛町教育委員会・西日本高速道路株式会社中津工事事務所・上毛町建設課との間で工事着手のスケジュール及び調査方法、追加指定の予定についての協議・調整を行った。4 月 12 日には西日本高速道路株式会社中津工事事務所と現地協議を行い、事業者側から唐原山城跡の南側部分を東西方向に掘削されるトンネルの西坑口部分を 5 月初旬から工事着手すること、東坑口については 11 月には西坑口からの掘削が東坑口に及んで開口する、という工事スケジュールが示された。東坑口で遺構が確認されて調査期間が梅雨時期にかかった場合、すぐ北側に接する貯水池に赤水が流れ込むことが懸念されることから、まずは東坑口の工事によって掘削される部分の地形測量に 4 月 16 日から着手し、1/50 の平板測量を 5 月 2 日までに終了した。なお、等高線は、地元教育委員会が作成した既存の図面に合わせ、20cm 間隔とした。5 月 10 日には唐原山城跡に関わる遺構を確認するために 0.4m³ のバックホーを用いて掘削を行い、記録を作成して調査を完了した。一方の西坑口部分は掘削用の重機の手配が整った 4 月 20 日に確認調査を実施し、トレーンチ内の地形測量を行った。西坑口部分に関しては町道田淵小池線を敷設する際に切り土と盛土を行っていることは明らかであったため、旧地形が残っている可能性が高い箇所を選定してトレーンチ調査を行った結果、旧地形を確認し得たものの、工事予定箇所において唐原山城跡に関わる遺構は検出されなかった。当該箇所に関しては、坑口の掘削時に再度工事立会を行うことで事業者と協議を整え、5 月 30 日と 31 日の両日、中津工事事務所・上毛町教育委員会とともに現地を確認した。

唐原山城跡の発掘調査は、「土佐井小追遺跡」で記したような経緯により平成 11 年度から路線にあたる部分の範囲確認を手はじめに地元教育委員会が国庫補助事業として 2 度の調査を行った（平成 11 年度～平成 14 年度、平成 15・16 年度）。平成 11 年度は 1/500 の地形測量図作成・踏査、平成 12 年度は列石が確認された箇所の地形測量及び列石線周辺のトレーンチ調査、平成 13 年度は土壠と第 3 水門東側平坦面の調査で 3 間 × 5 間の礎石建物を確認するとともに、その南東にある第 3 水門の発掘調査を実施した。さらに平成 14 年度は第 1 水門の図化と第 3 水門の調査を、平成 15・16 年度の第 1 水門の調査を実施し、これまでに唐原山城跡の範囲と構造の概要が把握されている。

2) 遺跡の概要

遺跡は、標高 1199 m の英彦山から東に連なる山系のうち、もっとも東側の大平山（標高 597 m）から北に派生する丘陵上に立地する。この丘陵は東を福岡県と大分県の県境を北流する山国川に、西は東友枝川（本遺跡の南西で友枝川と合流）によって挟まれている。遺跡はこの丘陵の北西端部に位置する。遺跡の西側は急傾斜地となって友枝川に接しており、東側には北に開ける小さな谷が入っている。また南側は鞍部状の地形を介して半ば独立丘陵状の立地となっている。南限については町道田淵・小池線が最も南側に張り出す辺りとなる。

唐原山城跡の規模は東西約 600 m、南北約 750 m および、標高は 63 ～ 83 m を測る。友枝

川に面した西側を除いて列石が廻り、北・北東・東の各方向に開ける3箇所の谷部には水門（第1水門・第2水門・第3水門）が設けられる。このうち、第3水門の城内側では3間×5間の礎石建物が確認されている。今回の調査地は遺跡の南端部の西側と東側の2箇所で、ともに列石線（西側では推定列石線）の下方斜面部を東西方向に横断するトンネル坑口部分にあたる（第9図）。

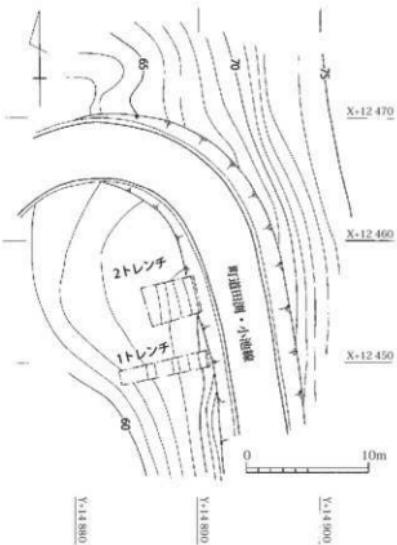
3) 調査の内容

i) 西坑口部分（図版7、第13図）

現状からみると、町道田渕・小池線の敷設工事時の切り盛りによって旧状がかなり改変されていることが窺われたが、旧地形が遺存する可能性が高いアーピングカーブ部分に等高線に直交した2本の調査区を設定し、0.25m²のバックホーを用いて掘削を行った。調査箇所は想定列石線から25mほど城外側にあたる。それぞれのトレンチの基本層序は①表土→②締まりのない暗黄褐色粘質土／厚さ40～90cm。→③橙褐色粘質土（10～20cm大の角礫を含む）／厚さ1mほど。→④暗黄褐色粘質土となる。②層及び③層は町道田渕・小池線建設際の盛土で、ビニール袋片が埋土中に含まれていた。地山直上には④層が5cmほど堆積しているが、地山との間に旧表土は遺存しておらず、工事の際に掘削が及んでいるものと判断された。

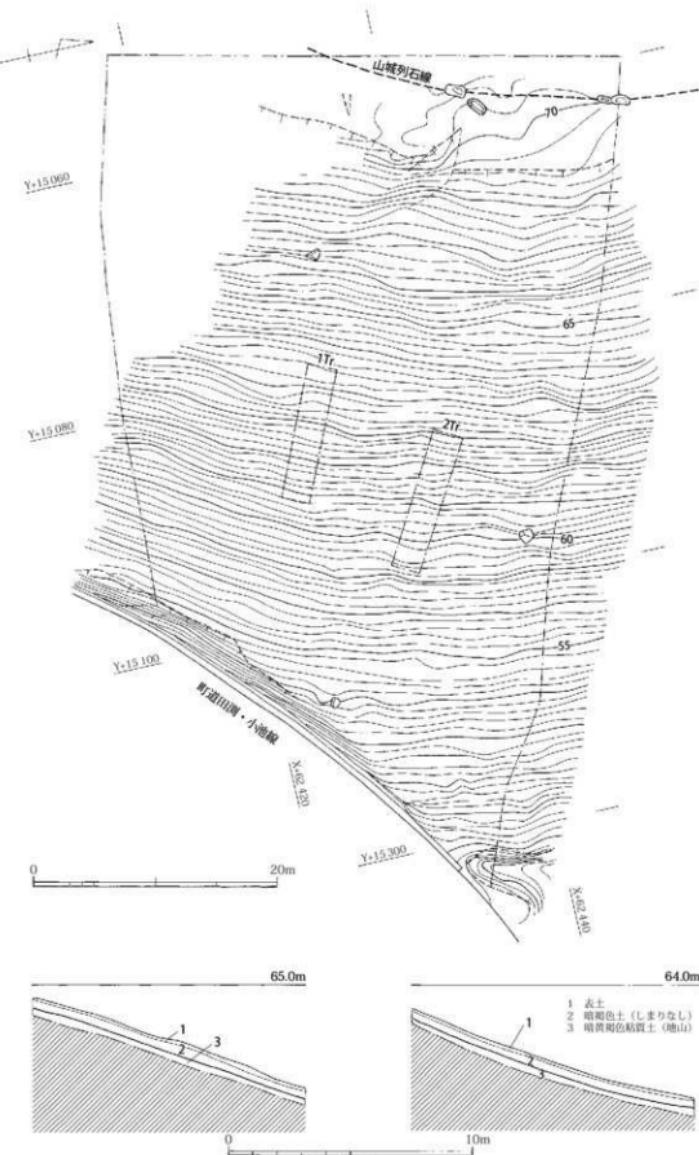
ii) 東坑口部分（図版8、第14図）

当該調査区のうち、坑口によって掘削される箇所の標高は概ね50～60mのレベルである。唐原山城跡南側部分の列石線は標高約70mの等高線に沿って走っており、調査地は列石線から約30mほど城外側となる。まず、工事用地内について平板による測量を行いつつ、現況観察を行った。その結果、列石線から南側（城外側）5mほどには築城の際の造成と思われる平坦面があり、その平坦面の端部にあたる地形変換線より城外側の斜面に関しては、段造成や盛土などの人為的な痕跡を表面的な地形観察で確認することができなかった。なお、斜面の傾斜角は18度7分を測る。そこで、工事で掘削される部分に等高線に直行した2本の調査区を設定し、0.4mのバックホーを用いて掘削を行った（1トレンチ：2m×11m、2トレンチ2m×11m）。それぞれのトレンチの基本層序は①表土→②締まりのない暗褐色土／厚さ30～40cm→③暗黄褐色粘質土となる。②層は上方からの自然堆積層で斜面下方に向かってほぼ均一の厚さで広がっていた。この②層上面やその下部の③層においては切土や盛土、あるいは防御的な遺構などの存在も想定されたものの、これら山城跡に関連する可能性がある遺構は検出していない。③層はいわゆる地山で、念のため下層の黄褐色粘土層（風化礫を含む）～黄白色粘土層（風化礫を含む）まで掘削を行っている。



第13図 唐原山城跡西坑口区地形測量図(1/400)

第14図 唐原山城跡西坑口地形測量図・土層実測図(1/400、1/200)



4) 小 結

今回の調査区は西坑口部分・東坑口部分ともに唐原山城跡の城域に含まれるが、山城跡に関する遺構を確認することはできなかった。

西坑口部分については道路建設時に旧地形が改変されてはいたものの、等高線は概ね南側・北側の等高線のラインに沿うように走ることが考えられ、旧状を復元する材料を得ることができた。この調査区の斜面上方、城域の南西面にあたる部分では、町教育委員会によって列石の存在が想定されている。唐原山城跡で列石が確認されていない部分に列石がもともとあったのか否かに関しては、「未完成説」も含め、この種の山城跡の評価が一定していない現時点においては即断できない。しかしながら、九州における古代山城跡の列石ラインの現状が多様であることを踏まえても、類似遺跡である朝鮮式山城が例外なく城域を土壘・石類もしくは石垣で全周させると対照的に、神籠石式山城で完結するものは皆無である。筑紫野市阿志岐城跡では防御のための造作が不要ではないかと思われるほどの急峻な地形の場所でも石列をめぐらしているが、急峻な地形で山城の背面側にあたる場合は列石が確認されていないみやま市女山神籠石のように自然地形をもって防御壁となしたような事例も多い。唐原山城跡においては列石が未確認である部分は急傾斜地形となつており、また、友枝川によって地形的に完全に区切られているため、自然地形を生かした構造とも考えられる。しかしながら一方で、あくまでも仮定の域を出るものではないが、唐原山城跡から移動した可能性が極めて高い石材が中津城の石垣に組み込まれており、当初から列石が存在しなかった可能性を示唆する上記2点は、逆に水運を利用して運ぶ際の格好の条件を備えているともいえる。

列石線の有無を含めた構造の問題については、九州各地に存在する古代山城の評価が定まった段階で位置づけるべきであろう。また、当初は列石が回っていたのか、計画はしていたが築城を断念するなどの原因で適わなかったのか、もともと自然地形を利用したのか、神籠石式山城の全体的な評価を固める上でも唐原山城跡の列石が未確認箇所の選定調査を行うことは重要な知見をもたらすものと思う。



唐原山城跡西坑口工事立会



第15図 穴ヶ葉山南古墳群調査位置図 (1/2,500)

5 穴ヶ葉山南古墳群 2 次

1) 発掘調査に至る経緯

平成 22 年度、年度当初に行橋市で調査を行っていた班が梅雨をもって一旦撤収する運びとなつた。中津工事事務所とは毎月連絡調整会議を行つていて、次の調査箇所について上毛町教育委員会が調査中のガサメキ古墳群（ガサメキ遺跡として登録していたが、本報告に当たつて改める。）の隣接地の 1 基の古墳、及びやや東の穴ヶ葉山南古墳群（これも穴ヶ葉山南遺跡として登録していたが、改める。）の調査を行うことで協議が整つた。

発掘調査は同年 7 月 5 日から墳丘が残存していたガサメキ古墳群 2 区 1 号墳について、地形測量と清掃から開始した。その周辺の開墾された広大な用地内の確認調査を行つて、客土に覆われて墳丘が全く見えていなかつた 2 号墳を発見、これらの調査を行つて後、9 月下旬から徐々に穴ヶ葉山南古墳群の調査に移つていひつた。

今回調査を行つた穴ヶ葉山南古墳群は、葉などの線刻壁画で著名な国史跡穴ヶ葉山古墳の南西 300 m ほどの同一丘陵上に位置する。穴ヶ葉山古墳のるる丘陵の南には浅い谷が入つていて、それを挟んだ南の支丘上で穴ヶ葉山南古墳群と呼称された 4 基の古墳が昭和 58 年度に調査されている。今回の古墳群はそれらに継続する番号を付したもの、距離的にはガサメキ古墳群がより近くに位置する。遺跡の名称やグルーピングについてはなお検討を要するであろう。

さて、この調査区でも明らかにそとわかる古墳は 1 基であったが、その北側に僅かな高まりと大型の石材が見えていた。結果的にこれが小型の横穴式石室墳であったことから、ここでも 2 基の古墳の調査を行うこととなつた。発掘調査は平成 22 年 7 月 5 日から翌 23 年 1 月 31 日にかけて実施、全体の調査面積は約 4,000m²、穴ヶ葉山南古墳群は約 1,600m² であった。

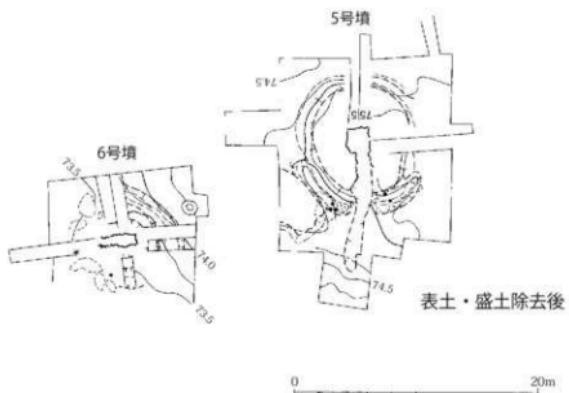
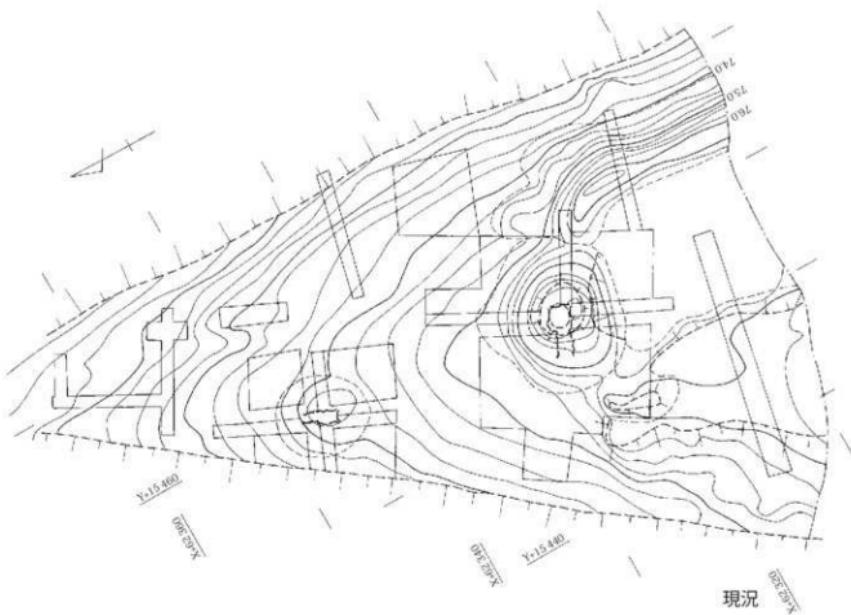
2) 穴ヶ葉山南 5 号墳

古墳が所在する付近は雑木山で、伐採前の踏査の段階で古墳 1 基の存在が判明していた。それがこの 5 号墳である。墳頂に山桜の巨木があつて、その根が石室内にまで入つていてすべての除去はできなかつた。玄室の天井石は既に失われていた。

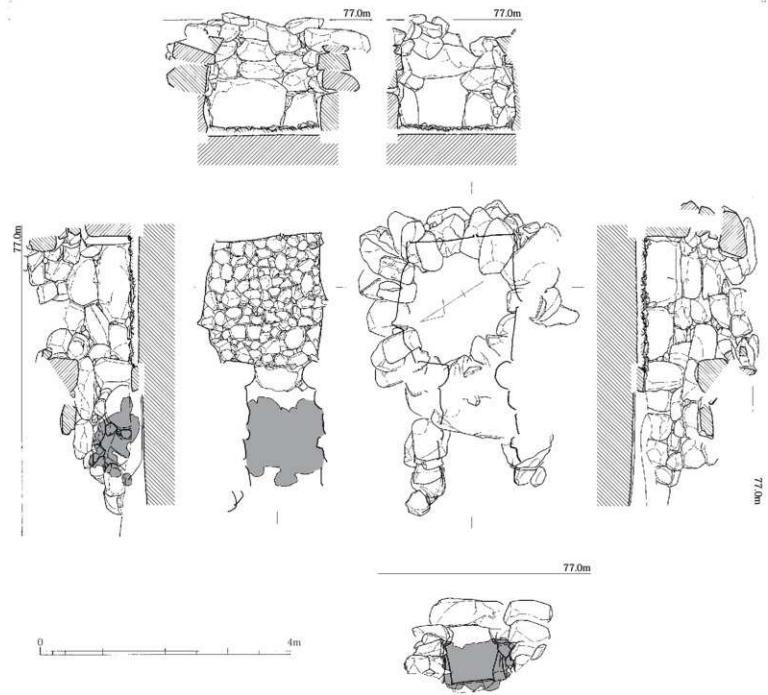
i) 墳丘 (図版 9・10・11、第 16・18 図)

現況での規模は東西長 13 m、南北長 12 m のほぼ円形を呈していたが、南側は明らかに削られていた。この丘陵は南から北へ延びるもので、古墳の東側は急傾斜で谷へ落ちていく。西側は現状では町道を挟んでやはり大きな比高差をもつて落ちているが、これは後の地形変化によるもので、本来の尾根線はもっと幅広かったようである。いずれにしても、この古墳は尾根の東の縁に位置している。次年度報告のガサメキ古墳群は距離的に近いが、丘陵西側の縁に位置する点で別グループといえようか。

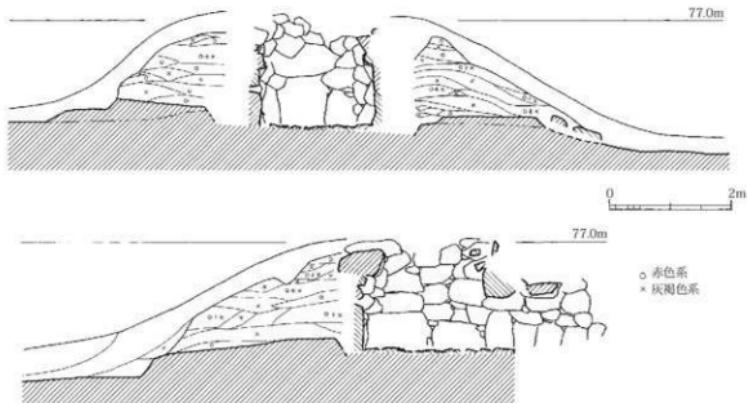
さて、古墳のすぐ南は開墾されて平坦な地形となつていて、その開墾時に古墳南側が部分的に削られたようである。また、この平坦地の東には 0.5 m 余りの高さの土壠が尾根線東端に築かれていた。東側の裾は判然としないが、西裾と同じ等高線を拾つた場合には幅 2 ~ 3 m ほどの規模と



第16図 穴ヶ葉山南古墳群地形測量図(1/400)



第17図 穴ヶ葉山南5号墳主体部実測図(1/60)

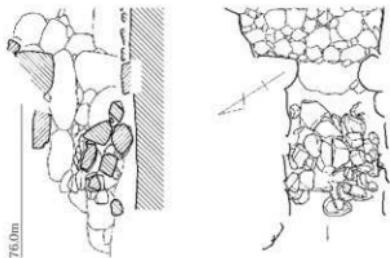


第18図 穴ヶ葉山南5号墳埴丘土層実測図(1/80)

なる。1部で断ち割ってみたが、ビニールなどが入っていたことからこの数十年内の「遺構」と判明したために詳細な記録作成は行っていない。

主体部の天井石が抜かれて石室上端部が覗いていたことから、主軸を想定して南北・東の3本のトレンチを設定した。地山は灰黒色系のいわゆる旧地表で、盛土は地山の赤褐色粘質土とその風化した褐色系の土を用いていて、特殊な積み方は看取できなかった。

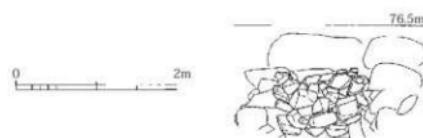
東畦では玄室中心から4m付近まで盛土が見られるが、それから0.2~0.4m東の地山に高さ0.4mほどの段が見られた。いわゆる地山成形である。北畦では埴堀付近に石材があつてはっきりしなかつたが、玄室中心から4m付近まで盛土が見られる。南畦では、先述したように削られていて盛土は玄室中心から3mの付近までが残るだけであったが、地山成形の痕跡と思われる0.2mほどの段が同4mの付近で観察された。以上のことから、南北長では8mほどにわたって盛土がなされ、地山成形まで含めると8~9m近い規模に復元できよう。東西長では盛土東端から主体部前端までの長さは7.6mであり、やはり8m前後の規模を意識したものであろう。なお、墓道に接する埴丘西半のみに深さ0.2~0.3m、幅1.5mほどの周溝が付されていて、それを含めた東西長は10mほどとなる。また墓道は石室前端から更に7.5mほど伸びている。



ii) 主体部

(図版10・12~14、第17・19図)

單室の横穴式石室である。天井石は既に多くが失われていて、袖石上の帽石ほか1個が残るのみであった。内部



第19図 穴ヶ葉山南5号墳閉塞状態実測図(1/60)

第20図 穴ヶ葉山南5号墳墓道遺物出土状態実測図 (1/30)



には土が充填していて、そのためか床面の敷石の残存状態はよい。ただ、樋石付近に先の山桜の巨株があって、一部圧化できなかった部分がある。

床面の規模は長さ約2m、幅幅1.5~1.9mで方形に近い長方形となるが、玄門は南西に偏している。ただ、南西側の袖石も明らかに迫り出していることから、ことさらに片袖を意識したという解釈をする必要はないであろう。

奥壁は2個の腰石を用い、その上に最高で4段を積み上げている。左右両側壁も腰石は2個、その上に3~4段を積み上げる。残存する壁体の最高所から敷石までの深さは1.8mである。

椎石のすぐ前面に塊石を用いた閉塞が置かれていた。この状況を見ると、樋石の前面に今一つ天井石が置かれていたのかも知れない。袖石の前面の貼石（羨道部・前庭部）は左壁で約2m、右壁では約1.6mに過ぎない。

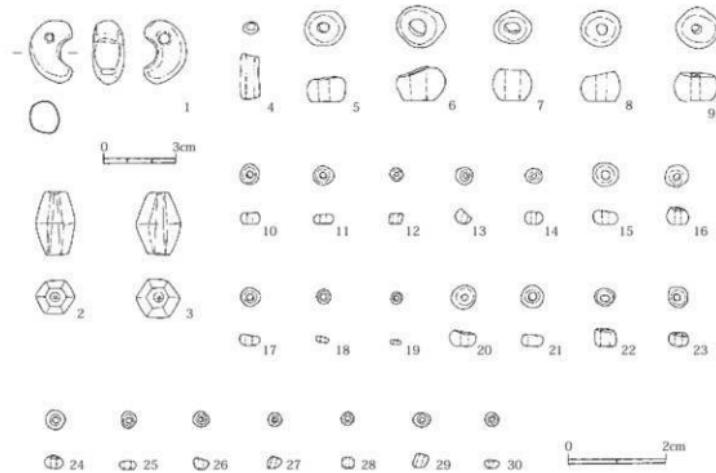
各壁の石積みは重箱積みが基本となるようである。

III) 出土遺物 (図版13~15、第17~20図)

主体部内から鉄製品や玉類、墓道や主として墳丘の西半部から比較的多くの土器が出土した。

玉類 (図版22、第21図)

玉類は主体部右奥、南東部に集中していて、多くが敷石間に転落していた。1は硬玉製勾玉で、大部分が灰白色となるが部分的にわずかに薄緑色となる部分がある。厚みがあって、孔は片面穿孔。孔周辺は光沢があるが、その他はほとんど光沢が無く、微少な凹凸も残る。最終的な研磨が難で終わっているようである。2~3は6面を研ぎ出した水晶製切小玉で、これらも片面穿孔。2は図上部の孔周辺が剥離している。現状では水晶の透明度はさほど高くはない。3は濃い群青色となるガラス製管玉で、形状が小さく歪む。5~9も濃い群青色の不透明なガラス玉。直径0.8~1.0cmの比較的大きなもので、形状は一定しない。図示していないが、大きさ・発色が同じような玉が他に43点ある。10~30はガラス小玉。10~12は灰赤色~茶褐色不透明で、煉瓦のような色になる。13~14は淡黄色不透明、15~19は群青色系の小玉で、微妙な色幅がある。この類は他に23点以上ある。23~30は青系・黄緑系で透明感のある玉で、いささか恣意的な分類となるが、



第21図 六ヶ葉山南5号墳出土玉類実測図 (1/1・1/2)

表2 穴ヶ葉山南5号墳出土玉類計測表

No.	最大径	厚さ	孔径	形態	色調	備考
1	1.6	2.6	0.1~0.4	透明	透明	
2	1.8	2.6	0.2~0.5	透明	透明	
3	2.6	1.3	0.3~0.5	乳白色~透輝	表面つるつる	
4	8.3	5.3	2.5	C	青	
5	10.0	7.0	2.8~3.6	C	青	
6	7.7	6.7	3.2	C	青	
7	8.1	5.0~5.9	2.0	C	青	
8	8.9	5.8	1.5~1.8	C	青~緑	ひび割れ、気泡、外面よごれ
9	4.2	9.6	1.8~21	細	緑	
10	4.5	2.5	1.2	D	赤褐色	気泡
11	4.4	2.1	1.2	D	赤褐色	
12	3.7	1.5~3.1	1.1	C	黄	
13	3.5	2.7	0.9	D	黄	
14	2.8	2.1	0.8	B	赤褐色	
15	2.8	2.2	1.0	C	緑	
16	5.1	3.0	1.5	D	青	気泡あり
17	4.9	3.1~3.7	1.3~1.5	C	細	
18	4.2	1.8~2.2	1.5~1.7	D	透輝	
19	3.0	1.0~1.5	1.2	D	透青	
20	2.6	1.2	1.0	D	透青	気泡
21	5.2	3.1	1.3	C	緑	気泡
22	0.5	2.2	1.5	D	緑	気泡
23	4.4	3.4	1.8	B	透緑	気泡、不透明
24	3.5	1.6	1.3	D	透緑	気泡
25	3.0	2.3	1.2	E	透緑	墨み
26	4.8	2.8	1.2~1.5	C	緑	
27	4.9	2.5	1.1	C	緑	
28	3.3	2.2	0.7	D	黄緑	
29	2.8	3.0	1.1	B	透緑	気泡
30	2.8	1.7	1.0	D	透緑	気泡
31	11.7	9.7	2.1~3	F	透青~青	外面よごれ
32	9.5	6.9	2.5	C	透青	気泡
33	9.0	7.9	1.5	C	青	墨み
34	8.4	7.5	1.6~2.3	A	透青	外面よごれ
36	9.0	6.7	1.8~2.1	C	透青	気泡
37	8.6	5~6.3	3.5	C	透青	切り口斜め
38	8.6	5.8~6.1	1.6	C	透青	墨み、気泡
39	8.3	5~6	1.6	C	透青	墨み
40	8.4	6.1~6.6	1.5~1.8	C	透青	気泡、墨み
41	8.5	6.6~6.9	2.1	C	透青	若干ひび、気泡、墨み
42	8.0	6.5~6.8	2.0	A	青	墨み
43	8.5	5.5~6.3	2.0	C	青	墨み
44	8.3	6.1~6.8	1.7~2.5	A	細	墨み
45	8.1	5.7	1.4	C	青	墨み
46	8.4	5.5~5.9	1.3	C	青	墨み、気泡
47	7.9	5.5~6.0	1.5	C	透青	墨み
48	7.3	5.9~6.6	1.3	A	青	墨み
49	8.8	4.4~4.9	1.8~2.5	D	細	気泡
50	9.1	4.5~5.3	2.1~2.8	D	細	気泡、若干ひび割れ
51	8.5	4.7~5.3	1.4~1.8	C	青	墨み
52	7.8	4.9~5.4	1.3	C	青	墨み
53	8.0	5.3~5.6	1.7~2.2	C	細	気泡、墨み、若干ひび
54	8.1	4~5.8	1.7~2.7	C	細	気泡
55	8.4	4~5.9	1.9~2.4	C	細	
56	7.5	5.9~6.5	1.2~1.7	C	青	墨み
57	8.0	5~5.5	1.5	C	青	気泡、墨み
58	8.5	4.6~5.9	1.9	C	細	切り口斜め、墨み、墨み、気泡
59	7.9	5.1	2~2.3	D	青	気泡、墨み
60	7.9	4.9~5.5	1.5	C	青	墨み
61	8.6	3.9~5.0	2.0	D	青	気泡、墨み
62	7.9	4.8~5.4	1.5	C	青	墨み、墨み、切り口斜め
63	7.3	5.6~5.9	1.5	C	青	墨み
64	8.6	4.3~5.1	1.5~2.1	D	細	気泡、墨み、墨み
65	8.1	4.2~4.7	2.0	D	細	気泡、墨み
66	7.4	4.9~5.6	1.7	C	青	墨み
67	8.0	4.8~5.3	1.4~2	C	細	墨み、切り口斜め
68	7.9	5.1	1.6~2.2	C	細	気泡
69	8.3	4.9~5.3	1.5~2.0	C	青	
70	7.9	3.9~4.4	2.1~2.5	D	細	一部欠
71	7.8	4~5.8	1.5~2	D	青	気泡
72	7.3	4.9	1.7	C	青	墨み、気泡
73	7.6	3.5~4.2	1.8	D	細	墨み、切り口斜め
74	8.5	3.5	1.5	D	青緑	気泡、透明
75	8.2	2.8	1.4	D	青	墨み
76	5.0	3.2	1.3~1.8	D	青	気泡
77	5.9	4.0	1.0	C	透緑	表面ざらつく、一部欠
78	5.2	2.8	1.1	D	青	墨み
79	4.0	2.8	1.1	C	透青	気泡
80	4.4	2.8~3.2	1.3	C	青	気泡、墨み、一部欠
81	4.2	3.2	1.3	C	透青	
82	4.0	2.3~2.6	1.2	D	透青	墨み
83	3.9	2.9	1.3	B	透青	
84	3.9	2.5	2.7~2.5	0.9	A	透青

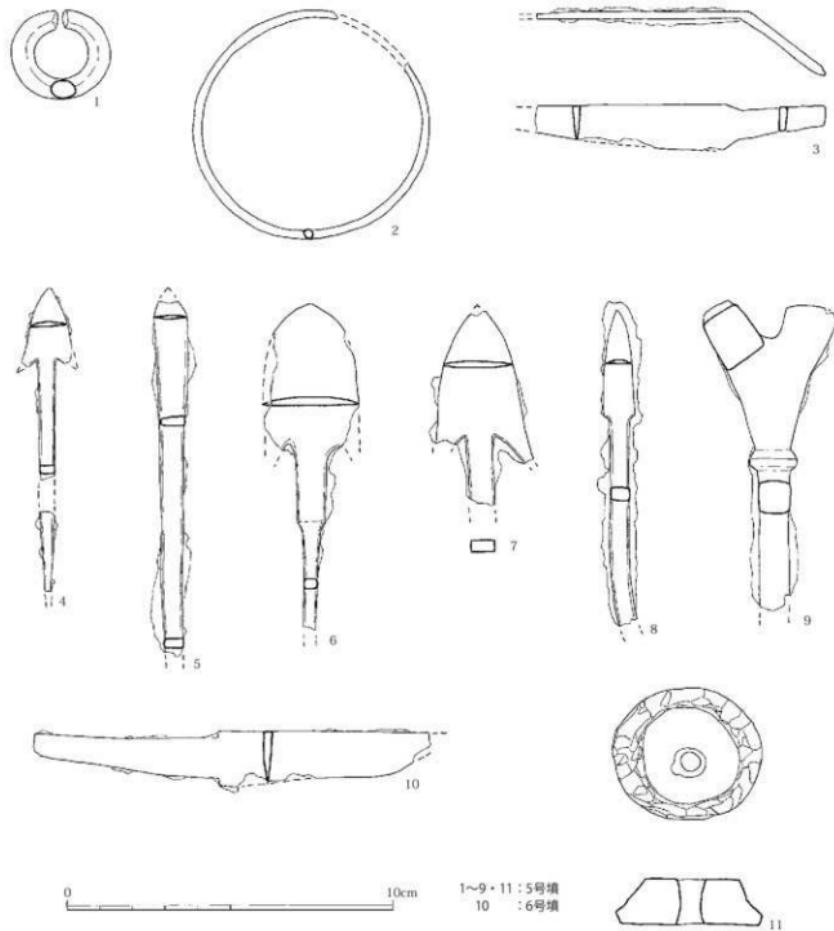
ガラス玉の形態 A (I) B (II) C (III) D (IV) D (V)

青系が52個以上、黄緑系が23個以上ある。また、図示していないが小玉の中に一点だけ黄緑色不透明な物がある。

金属製品（図版21、第22図）

1～3は主体部内、4～6は墓道、7は墳丘南西部の土器が集中する付近から出土したものである。8・9は墳丘北西部出土であるが、詳細が記録されていない。

1は重量感のある耳環で、直径3.0cmほどである。全体に縁青が表れているがなお銀が比較的残存する。2は銅鏡で、全体に縁青が吹いているがなお遺存状態は良好といってよい。金銀は見えず、断面形状はは基本的に円形である。4片となっていて、図上復元した径は7.0～7.3cmである。3は切先を欠く刀子で刃部が多くが欠失する。



第22図 穴ヶ葉山南5・6号墳出土金属製品等実測図(2/3)

4は返りをもつ三角形鏃で平根となる。5は茎と身の間に明瞭な区別が見えない鏃。6は幅広い平根鏃で、闊がつく。図左下の抉りが生きているようで、返りをもつものと思われるが、左右対称となりそうにない。7は6と同じような形状のものであるかも知れないが、身幅がやや小さくなる。8は細身の柳葉形鏃で、切先付近の形状が錯で不明瞭となっている。片丸造りである。9は一見雁股鏃のようであるが、Y字形に分かれた頭部はいずれも断面方形ないし長方形となっている。突帯から下位も断面方形となっていて、いわゆる「玉杖」といわれるものの形状に近いようである。ただ、これだけは他の鉄製品と鏃の状況が異なっていて、表面に膜が張ったような感じとなっている。墳裾から出土したこともあり評価が困難である。

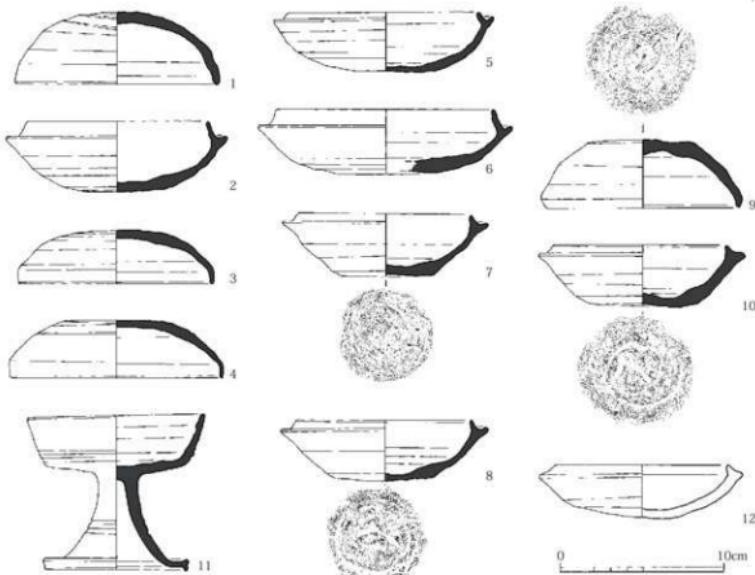
石製品（図版 22、第 22 図 11）

墳丘西北部で、土器が集中する部分から東へ外れた畦の近くで出土した滑石製紡錘車である。平面形が正円とならず、孔も中心から外れている。側線は匙面状となっているが、これも形態不整である。ここには刃物で削ったと思われる成形時の小さな加工面が無数に見られることから、これが不整形の一因であったと思われる。図上面に刻線が無数に入るが、弱く不規則なもので意図的な加飾とは思えない。図下面も剥離面の一部が研磨されずにそのまま残存していて、雑な作りといってよいであろう。

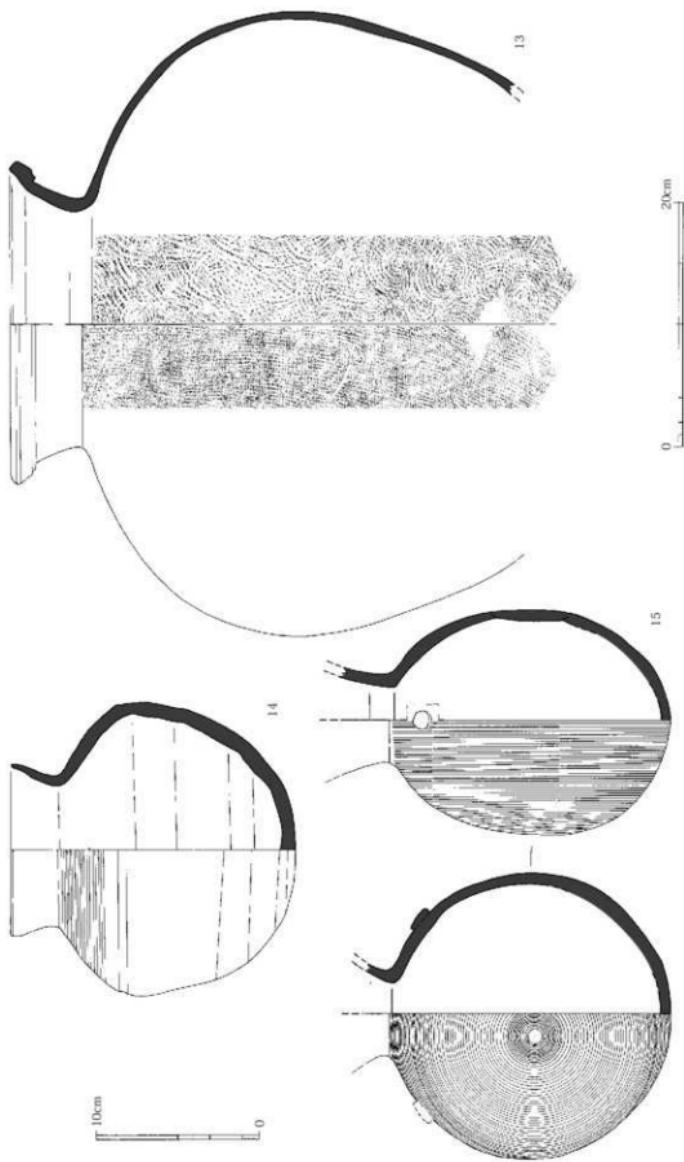
土器（図版 22～27、第 23～29 図）

土器は墓道とその両側の墳裾、浅い周溝から主として出土した。以下では、墓道内、墓道北側墳裾、同南墳裾に分けて説明を加える。

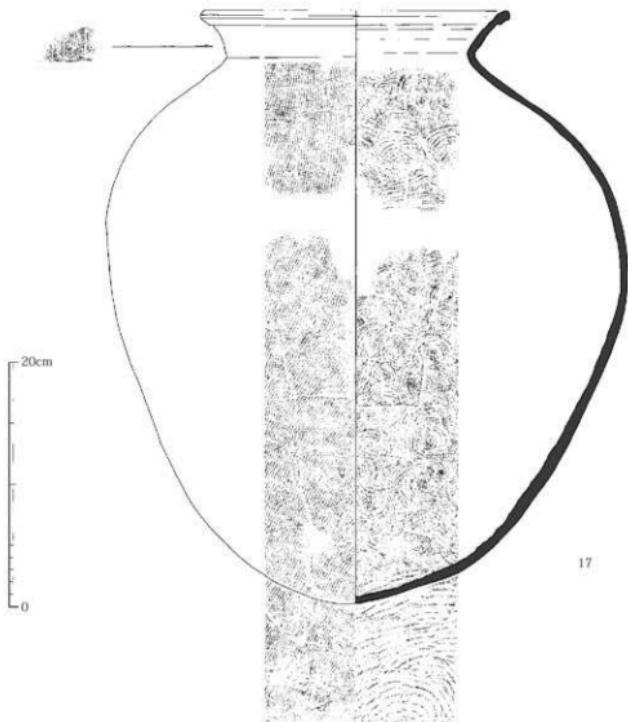
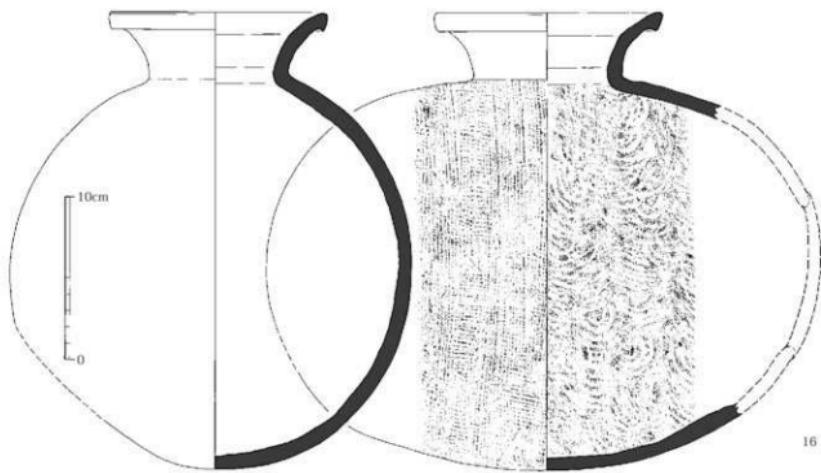
墓道内出土土器（1～17） 第 20 図に出土状態を図示した。天井部（底部）が丸みを失い、簾切り未調整で終わる土器が最も主体部に近い位置でまとまっていたことは示唆的である。



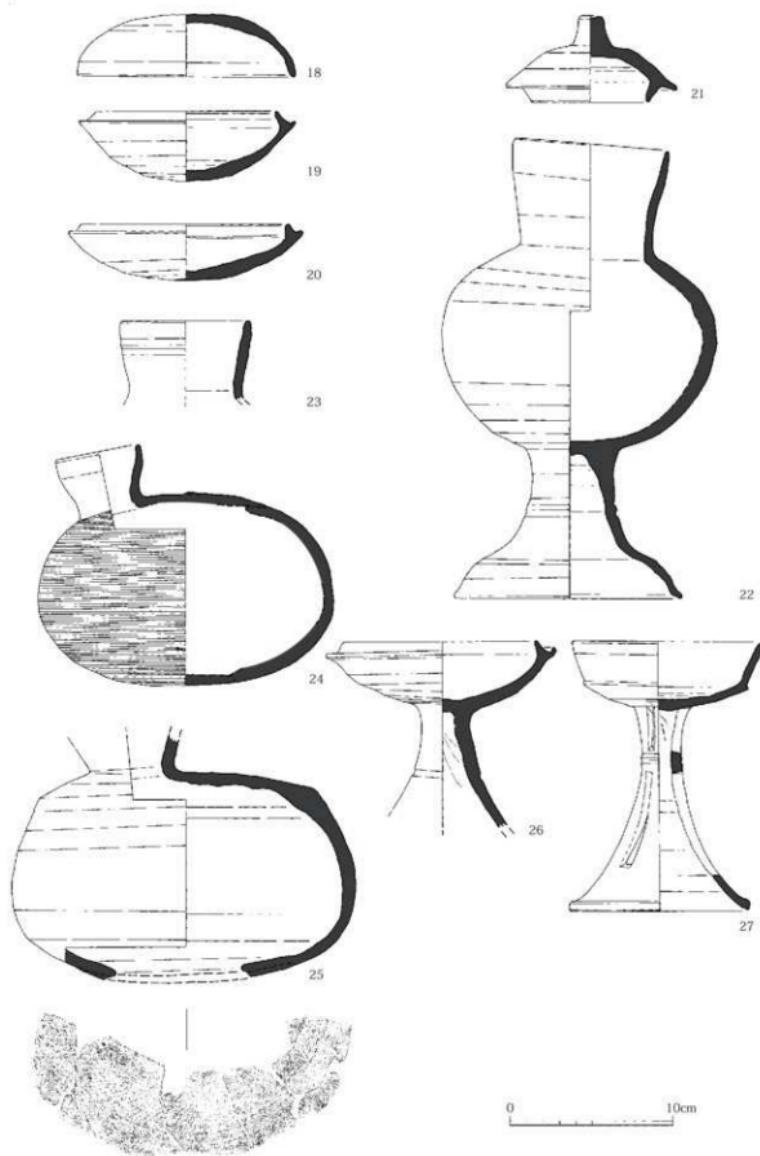
第 23 図 穴ヶ葉山南 5 号墳出土土器実測図 1 (1/3)



第24図 穴ヶ葉山南5号墳出土土器実測図2(1/3・1/4)

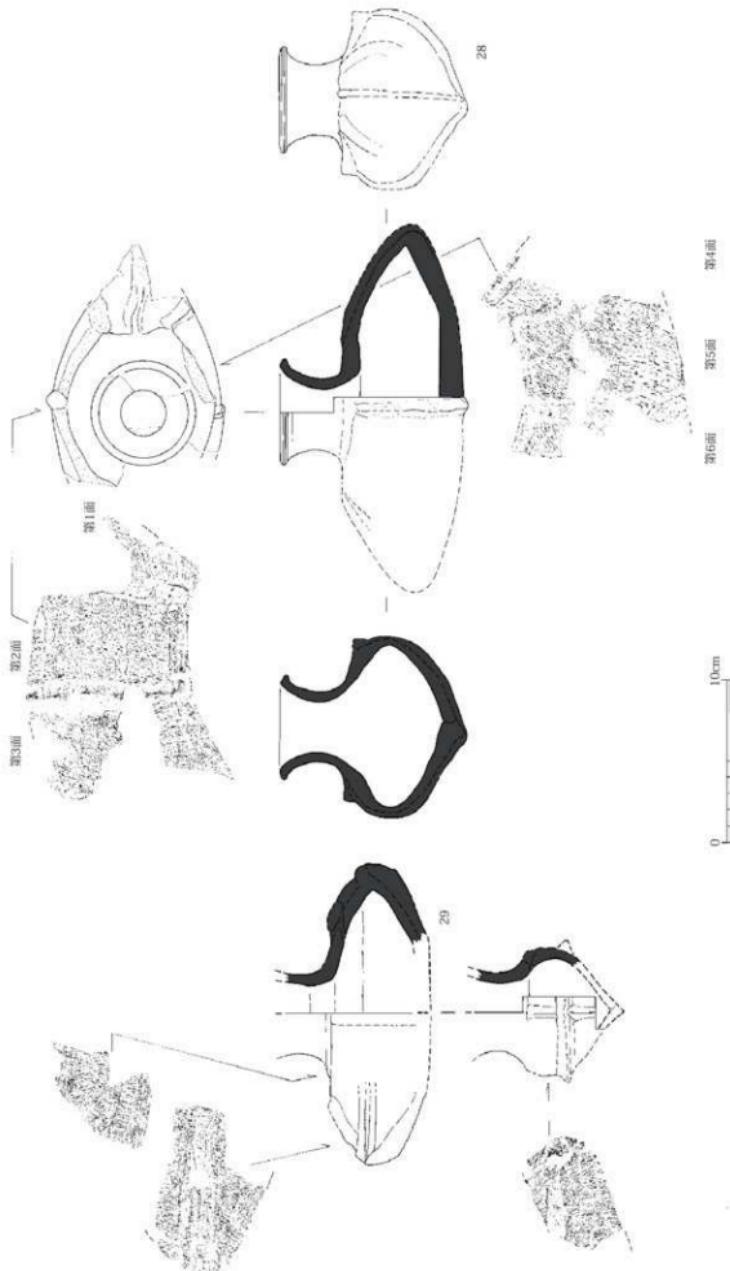


第25図 穴ヶ葉山南5号墳出土土器実測図3(1/3・1/4)



第26図 穴ヶ葉山南5号墳出土土器実測図4(1/3)

第27図 穴ヶ葉山南5号墳出土土器実測図5(1/3)



1・2は細片化して隣接して出土したもので、いずれも天井部（底部）外面を難な回転箆削りで仕上げ、同内面は不定方向の撫でを施す。本来セット関係にあったものとしてよからう。いずれも3/4ほどが残存。3は天井部が扁平となり、口縁部付近が踏ん張るように直立する。天井部の回転箆削りは丁寧で、焼成も良好。ほぼ完存する。4も3と同様の形態をもつが、口径が大きくなっている。ただ、1/4の残片であって、焼け歪んでいることから復元口径にはいさか不安がある。5は口縁部付近の1/3が残存。口縁部立ち上がりが短く内傾する。外底面は回転箆削りで仕上げる。6は口縁部付近の1/4が残存。外底面付近は丁寧な箆削りであるが、全体に作りが難となっている。7～10は天井部（底部）が平らとなる一群で、隣接しておかれていた9・10はセット関係にあつたものと思われる。ただ、出土時は蓋として図示した9が上向きに、身として図示した10が伏せて置かれていた。いずれも完形あるいはほぼ完形で、外底面は箆切り未調整、内面の横撫では丁寧になされる。7は焼成不良で灰白色となっている。

11は9・10の蓋杯に接して横倒しになっていた高杯で、口縁部の一部を欠く。杯部は口径に比して浅く、口縁部の開きが小さい。口縁部下半に二条の甘い沈線を刻むほかは施文がない。脚部も短脚で、二条の甘い沈線を刻む。

12は口縁部付近の1/2が残存する杯身。器形は須恵器によく似るが、黄白色となる土器である。器表が荒れて、調整痕は不明。

13は口径24.4cm、残存高41.5cmの焼け歪む甕で、縱方向で1/2ほどが残存する。口縁部と体部の多くが主体部に最も近い墓道内から出土し、南北双方の埴裾からも体部片の一部が出土している。14は短頸壺と呼ぶべきか。口縁部は小さく開いて、短く立ち上がり、端部をわずかに内側へ摘む。肩部は弱いカキ目、その下位は横撫で、底部付近は回転箆削りで仕上げるが、作りは難といつてよい。これも大部分が墓道出土であるが、一部が埴丘北西裾から出土している。15は墓道内で正置して出土した提瓶で、杯身（12）の上に置かれたような状態であった。口縁部付近と一方のボタン状貼り付けが欠損するほかはすべて残存。口縁部の欠損は焼成段階に生じたもののように見える。体部は全面をカキ目で調整。

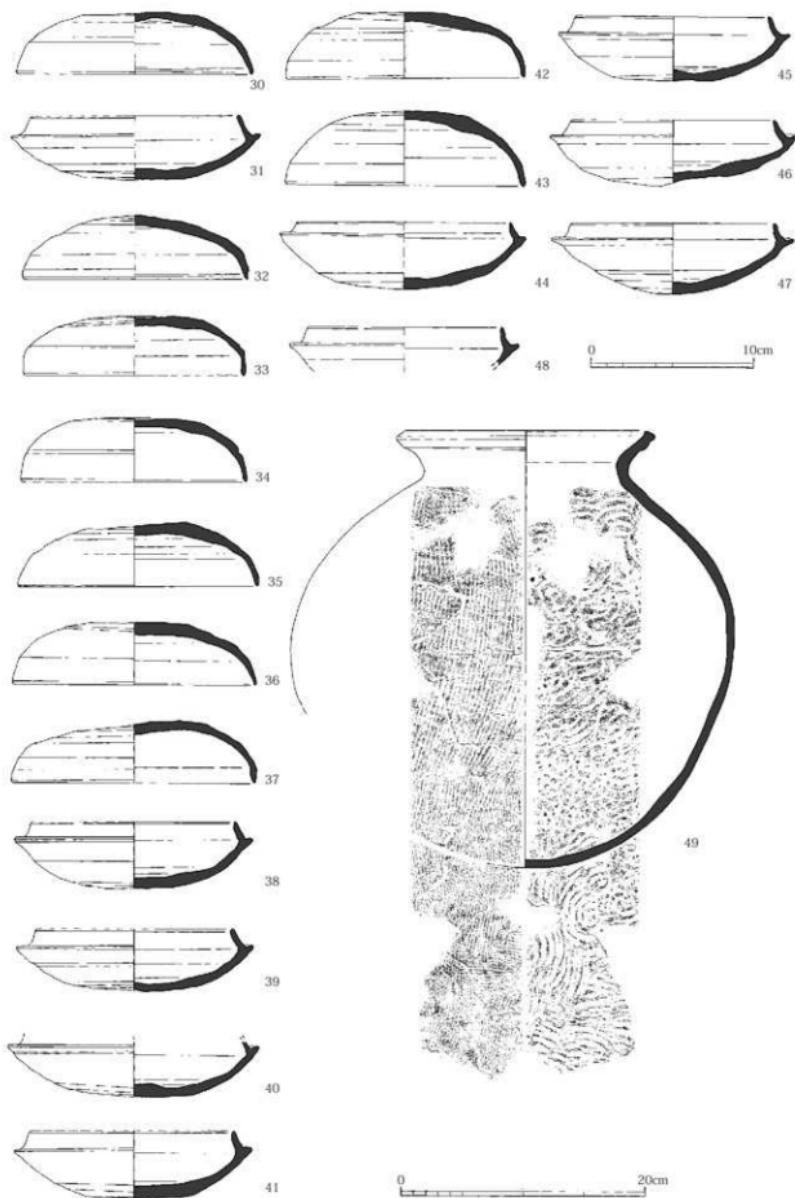
16は横瓶で口頭部は完存、体部もかなりの部分が残存する。口縁部は肥厚垂下させるだけで、体部もカキ目を疎に施して変化をつけるだけで装飾性に乏しい。図右端が成形時の上端であろうが、その付近は全面をカキ目で覆うが、本来の底部付近ではカキ目がなく、叩きだけで仕上げている。これも墓道から体部片が一部出土しているが、大部分は埴丘北西裾出土である。

埴丘北西裾出土土器（18～29） 検出時に形状を残していたのは24に示した平瓶だけといつてよく、ほかはほぼ細片化していたために詳細な図化を行っていない。取り上げの最終段階になって、21に示した蓋が完形で出土した。図示した土器はいずれも須恵器である。

18～20は蓋杯。18は1/3ほどの残片で、天井部から口縁部にかけて連続的に弧を描く。調整は丁寧。19はほぼ完存し、これは焼成が良くて黒色化する。この2点は外面を箆削りというより箆切りのまま未調整に終わるという点で似ており法量的にも合致するが、焼成の違いからセットとは思えない。20は立ち上がりが短いほぼ完存する杯身。肉厚となるが、調整は丁寧になされている。

21・22はセットである。21は高い大きなつまみを付す蓋で完存する。丁寧に作られていて、外面に褐色透明な自然釉が掛かる。22もほぼ完存する脚付直口壺で、焼け膨れが目立つ。壺の部分に加飾ではなく、体部最大径付近から上位は横撫で仕上げ、以下は箆削りで終わる。高い脚部には沈線を刻んで装飾するが、いずれも甘いものである。

23は平瓶の口縁部であろう。1/3の残片で、口縁部やや下に甘い沈線を1条巡らせる。24は



第28図 穴ヶ葉山南5号墳出土土器実測図6 (1/3・1/4)

ほぼ完存する平瓶で、体部は全面をカキ目で仕上げる。器表に焼け膨れが目立ち、口縁部付近では弾けて剥離する部分がある。また、通常は成形時の上端を塞いで後にやや外れた位置に口縁部を付すのであるが、これは成形時の底部から少しずらして口縁部を付す。25も24と同様に変則的な成形をしている。現状で上半となる成形時の下半部は通常見られる箇削りで仕上げていて、下半部には叩きが残るが撫で消している。

26是有蓋の、27は無蓋の高杯である。26は図示する範囲の脚部は完周するが、杯部は小片。焼成不良で、脚部の沈線も甘い。45はほぼ完存する。沈線や突線は甘いものであるが、胎土・作りは丁寧である。2段の透孔は3方に穿たれている。

28・29は皮袋形土器。28は北西墳壙を中心出土したもので、正面に図示した左半分および右先端を欠くが、後述する29を参考にして端部を復元している。緩く外彎して聞く口縁部の下位、肩部は無文とし、その直下に横位の断面三角突帯を付す。それに接して縦方向に中央および左右両端近くに縦位の三角突帯を下端まで及ぼすようである。図左右の突出部ではその稜線上にあたる位置にやはり突帯を付すが、これは下端の綴じ合わせ部分まで連続していたようである。肩部下の横位突帯は稜線上の突帯まで延びず、縦3本の突帯間で終わる。縦位の突帯および下端の綴じ合わせなどで8区画に画されていて、残存する6区画ではそれぞれ趣の異なる装飾がなされている。

第1面 やや細かいが不規則な格子を描き、横位突帯に相当する付近は横線のみとなる。意図的なものか不明であるが、斜位の線が2本ある。

第2面 大振りの格子と縦位の短い刺突で埋められている。短い刺突は獸毛を表現したもののようにである。

第3面 第2面に比して明らかに長い縦位・斜位の刺突が無秩序に刻まれるが、下端付近では刺突が少なく、斜位の直線が目立つ。第2・3面間の中央の縦位突帯では、第2面側では横位の刺突があるが、第3面側はほぼ無文となっている。

第4面 第3面同様のやや長い斜位の刺突で埋められていて、隣接する突帯も同様である。

第5面 第4面と同様な刺突であり、土器を正面に据えてみれば連続的に見える。

第6面 残存部が少ないが、第5面と同様の斜位の刺突で埋めるが、ここは角度が明らかに異なっている。また、中央突帯下端付近では逆方向の刺突が優勢である。

大粒の砂粒は見えず胎土は良好といつてよい。焼成も良好で灰を被って黒色化する部分が多い。

29は「北Tr.内土坑」の注記があるが、土坑を図化していないので調査時には遺構という認識が薄かったようである。頸部から肩部にかけての残片、および底部綴じ合わせの先端部付近などの3点がある。残存部から推測して、縦位の突帯は左右の稜線上および側面中央だけで、底部綴じ合わせのやや上方および肩部のやや下位に横位の突帯を付している。復元図では肩部片の剥離痕と底部片の剥離痕が同一のものとしているが、別のものである可能性も排除できない。施文はすべて斜位の繊細な刺突で、肩部から頸部中位まで突帯も含めて全面が同じような刺突で覆われている。

墳丘南西裾出土土器(30～53) 30～51は須恵器、52・53は須恵器の形態であるが、酸化炎焼成された土師質の土器である。30・31は胎土・作りともに良好で、色調も共通することからセット関係にあるものと思われる。杯蓋は微妙な差異があるものの、いずれも口端部は丸く終わり、天井部・口縁部の境に沈線を巡らせるものと連続的に移行するものとがある。また、天井部外面はいずれも回転箇削りで仕上げていて、口径は13.6～15.0cmで比較的まとまっているといえる。杯身も口径は11.9～13.0cmで法量的にまとまっている。これらも口端部を丸く収め、外底面は回転箇削りで仕上げる。なお、個別に気付いた点を記しておく。35・43は胎土や作り、色調や矢天井

部が高くなる器形などよく似た土器である。38は受け部以下はほぼ完存するが口縁部立ち上がりをすべて欠いていて、意図的なものであるかも知れない。41は灰黄褐色～灰赤褐色であるが、陶器質に焼かれている。

49は口端部を内側へつまむ球形部の甕で、歪みがあつて焼成は甘いようである。

50は一部が墓道からも出土している広口甕。口端部を肥厚させて、頸部中位に甘い沈線を2条巡らせる。体部下半は回転窪削り、上半は横撫でで仕上げ、内外面に叩きや当て具痕は見えない。51は口頸部が短くなる甕で、口縁部は外方に垂下させて凹面を作るが形状不整である。これも体部外面下半は回転窪削り、その他の部位は横撫でで叩きや当て具痕は見えない。また、焼成不良で瓦質に近い。

52は形状は須恵器そのものであるが土師質に焼かれた杯蓋である。胎土精良で器壁が薄いことや、復元口頸が11.5cmと須恵器杯蓋に比してかなり小さくなっているなど製作時から差別化されているようである。53は長方形2段透孔を3方に配する高杯で、須恵器の器形であるが土師質に焼き上がるために器表が荒れている。

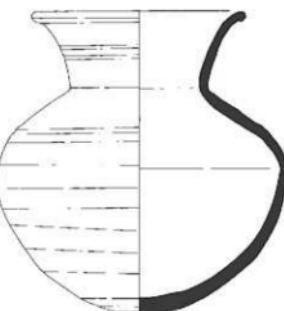
3) 穴ヶ葉山南6号墳

5号墳の北側、10mほどの距離を置いて位置する。前にも記したが、調査前は古墳と認識したものではなかったが、僅かな高まりと巨石の一部が覗いていたことから巨石の軸を考慮してトレンチを設定した。結果的に北トレンチがちょうど墓道と重なってしまい、墓道を確認できなくて終わってしまった。

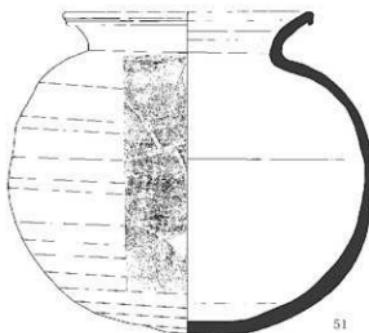
i) 墳丘(図版9・16・17、第16・30図)

調査前の見かけの墳丘は南北長7.5m、東西長6.5mほどの大きさで、高さは北側で0.5mほどであった。

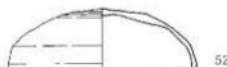
作成した土層図を図示した。盛土は5号墳同様、地山の赤色系の粘性の強い土及びその風化



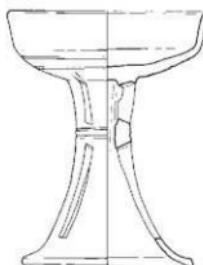
50



51



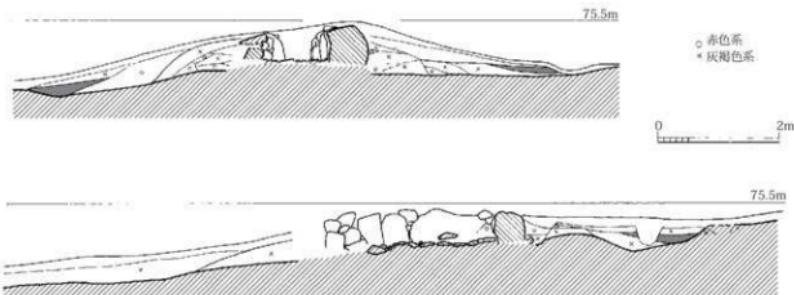
52



53

0 10cm

第29図 穴ヶ葉山南5号墳出土土器
実測図7(1/3)



第30図 穴ヶ葉山南6号墳墳丘土層実測図(1/80)

層の灰褐色系の土を用いていた。土層図の中で、灰黒色土をトーンを付して示したが、これが周溝の自然堆積層である。東畦南壁の土層図で、灰黒色土を覆い主体部近くまで広がる赤色系の盛土は調査時の所見では「二次堆積層」であるかも知れないとの注記がある。東西の灰黒色土層の最低レベル付近を基準にとれば、東西長は8mほどとなる。

南畦では幅2mほどの周溝が確認できた。盛土は主体部中心から3mの位置から始まり、その範囲は長さ0.8m、高さ0.2mほどに過ぎない。北畦では閉塞石の北側で1.7mにわたって「盛土らしくない。やや赤土混ざる」と注記のある土層があるが、これは墓道埋土であったのであろう。その部分を除いて広く灰褐色系の土が堆積していた。

盛土の規模を明瞭にできなかったが、南北方向に限れば墳裾から石室前端までの長さは2.2mほどに過ぎない。

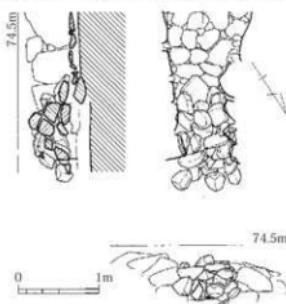
ii) 主体部(図版17、第31・32図)

単室の小型横穴式石室である。平面プランは石材の形状が不整なために乱れているが、おむね長さ1.8m、幅は0.85mを測る。敷石上から残存する壁体上端までの高さは0.5mほどに過ぎないが、これが本来の高さであったのか、判断に迷う。敷石は良好な状態で遺存していて、残存する壁体の高さがほぼ揃っていることを重視すれば、本来の高さを示していると考えることもできよう。周辺に天井石を想定する石材が見あたらないことから、あるいは木蓋を使用した可能性も考えられる。

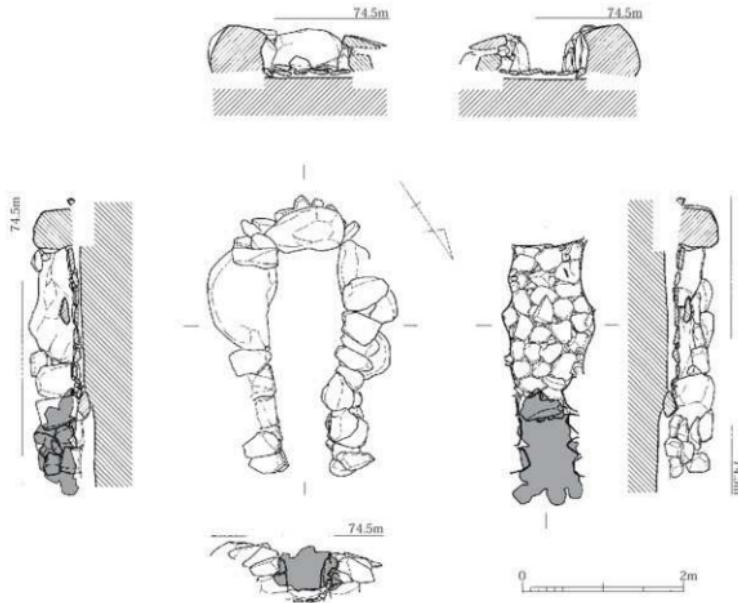
樫石に対応して、右壁から立てて使用した石材が0.2mほど張り出して平面的には片袖構造となっている。ただ、左壁も対応する石材は立てて使用していて、その前面の貼石とは石材の大きさや積み方が明らかに異なっている。玄室と樫石の前面には閉塞石が残存していた。

iii) 出土遺物(図版18、第16図)

主体部敷石上から刀子が、墳丘から土器群が出土している。土器群は主体部から見て北西部、主体部を望んで右手前の1/4区画ほどに集中していた。



第31図 穴ヶ葉山南6号墳閉塞状態実測図(1/60)



第32図 穴ヶ葉山南6号墳主体部実測図（1/60）

金属製品（図版21、第22図10）

主体部右奥、南西隅付近の敷石上から出土した刀子。茎はしっかりと残存するが、刃部の多くを欠損する。両闇造りで、茎に木質がわずかに残存する。

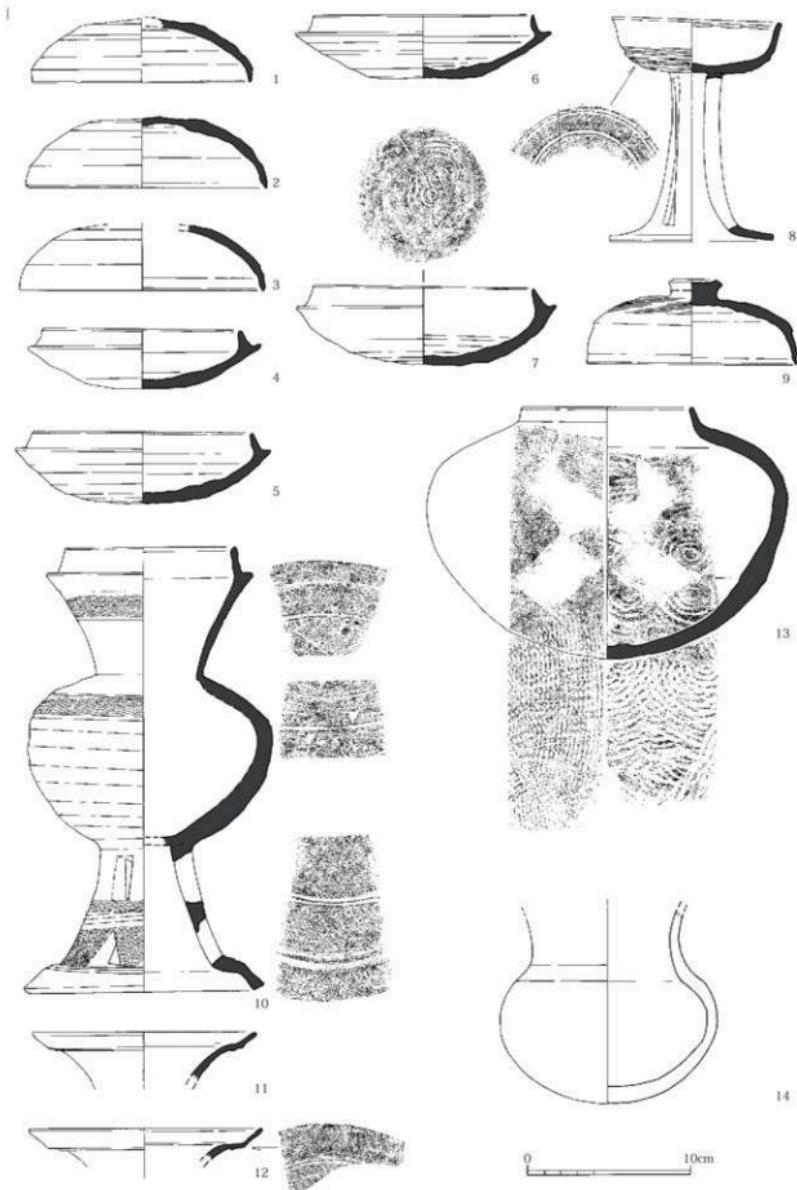
土器（図版27～29、第33・34図）

14に示した壺が土師器で、他はすべて須恵器である。出土地を記さない土器は墳丘北西部からの出土である。

1は墳丘東部から出土した杯蓋で、1/2弱が埋存。天井部外面にシャープな沈線で×が刻まれている。2は北Tr.および墳丘北西部に分かれて出土。1/2ほどが残存し、これは口端部に面をもつ。天井部外面の回転斂割りは丁寧だが中心部に及んでおらず、焼け歪みが見られる。3は外面に灰緑色の自然釉を被り、窯土が付着する1/2の残片で、口端部に弱い面をもつ。本来のにつまみがついていた可能性があり、高杯の蓋であるかも知れない。

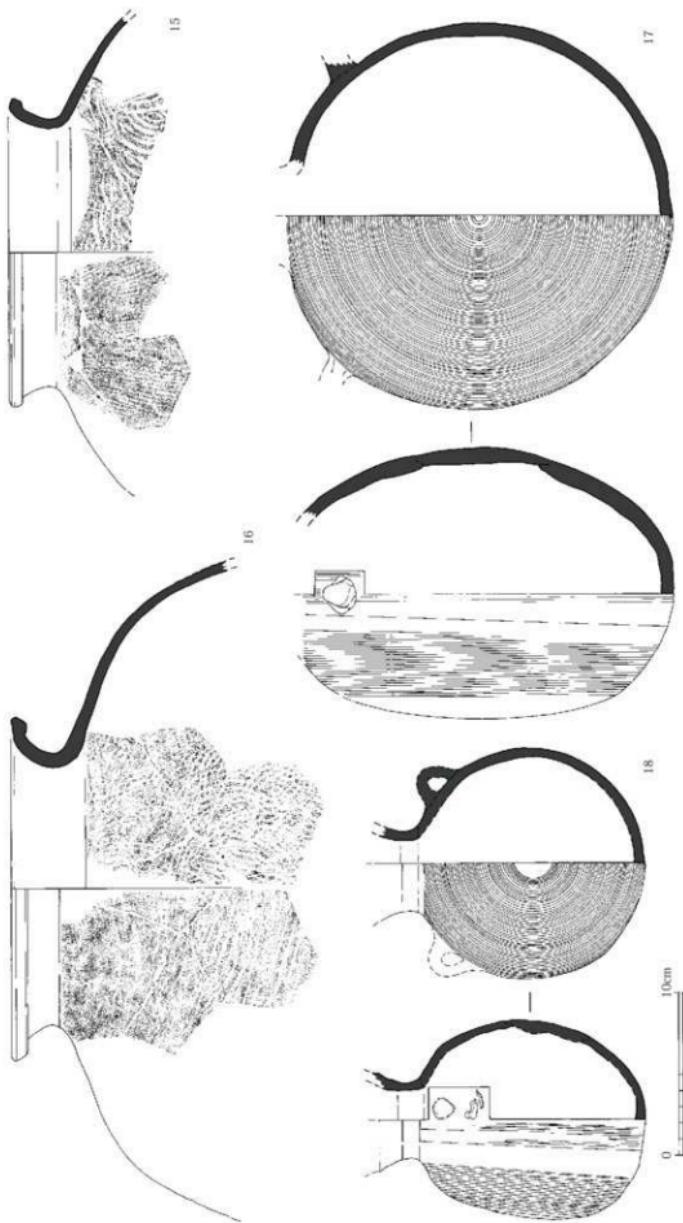
4は北Tr.・南Tr.・墳丘北西部から出土した杯身で、完存に近い。丁寧に調整されていて、胎土に黒色粒が目立つ。5は南トレンチ出土。受け部以下は3/4ほどが残存するが、立ち上がりは小片となる。丁寧に作られた土器であるが、焼成が甘く灰白色となる。6も丁寧に作られていて、焼け歪む。7は3/4が残存、作りが雑で焼け歪む。内面に同心円文當て具痕が残る。

8は杯部に比して脚部が発達した1段3方に透孔を付す高杯である。杯部口端部内面に沈線を刻み、外側の沈線や櫛描波状文はしっかりしている。9は大部分が残存する高杯蓋で、しっかりした大きなつまみがつく。口縁部はほぼ直立して端部に面を付し、天井部外面は全体を繊細なカキ



第33図 穴ヶ葉山南6号墳出土土器実測図1 (1/3)

第34図 穴ヶ葉山南6号墳出土土器実測図 2 (1/3)



目で仕上げる。後述する 10 とはセットではないようである。

10 は脚付壺で、受け部から下位の外面全体に黄緑色釉を被る。繊細な櫛描波状文を多用するが、整美なものではない。一部が北 Tr. から出土している。

11・12 は縦口縁部片で、11 は焼け歪むために復元口径に不安がある。12 は器壁が薄く、外面に整美な櫛描波状文を刻む。13 は一部が墳丘北東部から出土している短頸壺。頸部内面が丸みをもち、体部の張りが強い。

14 は土師器壺で、図示部はほぼ完存するが器表が荒れている。

15 は焼成が甘い壺で、口縁部を折り曲げて変化を加える。16 も口縁部にあまり変化を加えない壺で、体部外面は幅広く粗い叩きの後に細密なカキ目を施す。これも焼成が甘い。一部が南 Tr. から出土している。

17・18 は提瓶。17 は一方の把手の一部が残存する。凸面は全面にカキ目を施して叩きはほぼ消されている。18 は図示部が完存する小型品で、環状把手が付いていたようである。体部は灰を被つてほとんどが黒色化するが、その全面を細かいカキ目で仕上げるようである。

5) 小 結

今回は 2 基の古墳の調査を行った。町道を挟んだ西側は広く開墾されていて、開墾当時はかなりの古墳を壊したとの言い伝えがある。今回の調査に伴って、開墾地に 6 本の試掘溝を入れたが、古墳の残骸を全く確認できなかったこともあり、本来的にどの程度の古墳が存在したかわからぬ今まで終わった。

さて、今回調査した 2 基の古墳から出土した土器群にも時期幅があるようである。5 号墳では外面を簾切りのまま終わり、立ち上がりが最小化した蓋杯が墓道から出土していて古墳使用の下限を示している。まだつまみをもつ蓋が現れていないことも時期を絞り込む要素であろうか。また、周溝から出土した土器群は特に蓋杯については比較的まとまりをもった内容であり、古墳築造に際して一括廃棄されたものであると考えられる。6 号墳も少量の蓋杯に時期差が認められるようであるが、5 号墳に比べるとより古相を示している。第 33 図 8 の長脚一段透孔の高杯は古相を示すものであるが、ほかの出土土器や古墳主体部の在り方から、古墳築造は 6 世紀後半の範疇に収まるものであろう。

なお、過去に穴ヶ葉山南古墳群として調査がなされた 1 ~ 4 号墳については、いずれも奥壁が 1 枚あるいはそれに近い巨石を用いた石室であり、史跡穴ヶ葉山古墳に近接する古墳も含めて分散型といってよい配置となっていて、これらは（6 世紀末～）7 世紀以降の築造と考えられている。

他方、未報告であるが上毛町教育委員会によって調査されたガサメキ古墳群 1 区では 6 基以上の小規模墳が近接して位置していた。築造時期は先の分散型の古墳に比して 1、2 世代遅ると思われるが、今回報告した穴ヶ葉山南 5・6 号墳もガサメキ古墳群の在り方に近いといえる。

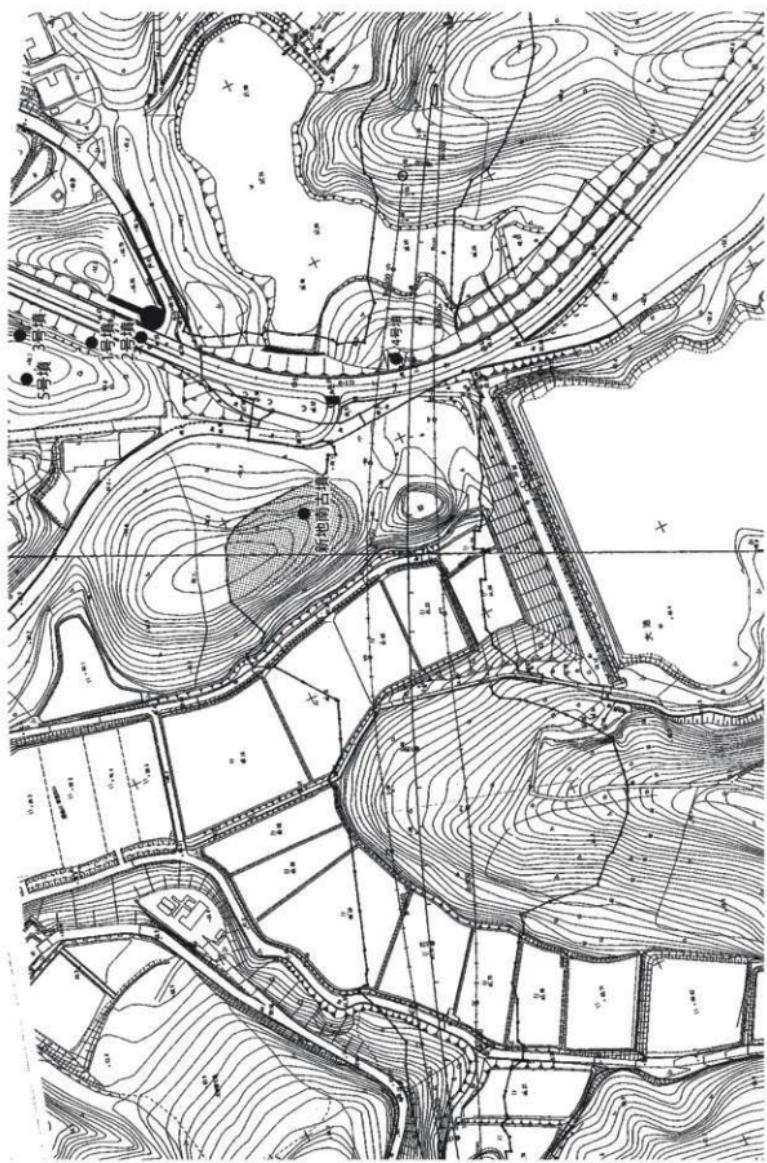
同一丘陵上で、6 世紀後半から 7 世紀にかけて古墳の変化が看取できる好例といえよう。

参考文献

大平村教育委員会「穴ヶ葉山南古墳群」(『大平村文化財調査報告書』第 2 集、1984)

大平村教育委員会「穴ヶ葉山古墳群」(『大平村文化財調査報告書』第 3 集、1985)

大平村教育委員会「史跡穴ヶ葉山古墳」(『大平村文化財調査報告書』第 10 集、1999)

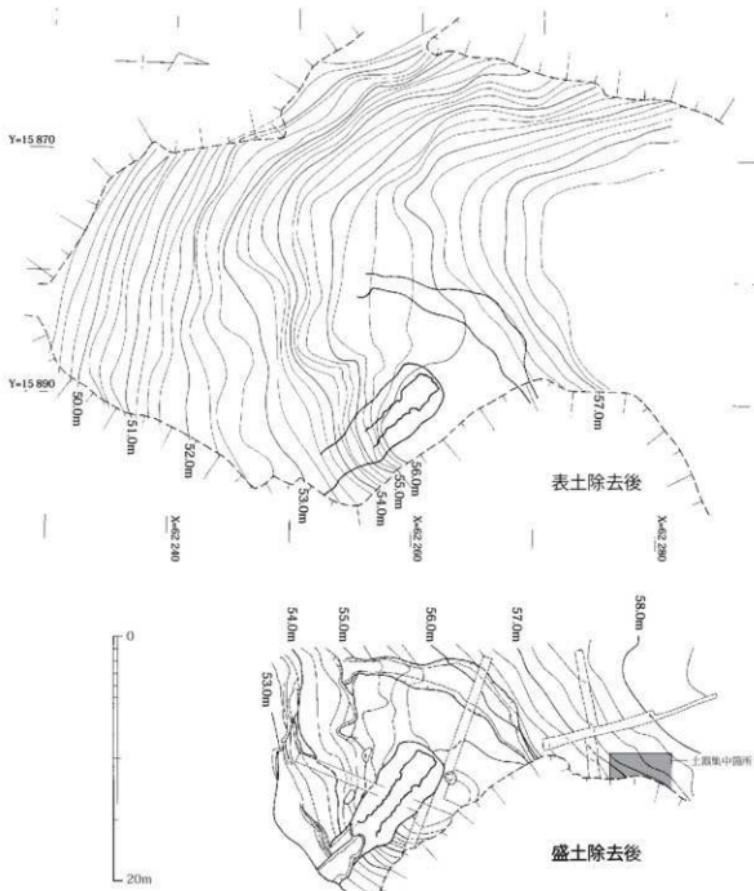


第35図 新池南古墳調査位置図 (1/2,500)

6 新池南古墳

1) 発掘調査に至る経緯

この新池南古墳は昭和 50 年（1975）に刊行された『福岡県遺跡等分布地図（農前・築上郡編）』に記された周知の遺跡である。ただ、平成 13 年に村道恒久橋上丸尾線の新設によって 2 基の古墳と埴輪焼成窯などが発掘調査され、「大久保橋迫遺跡」として報告書が刊行された遺跡が広範な範囲を包括していることから、東九州自動車道の計画路線内では第 44 地点にこの「大久保橋迫遺跡」の名称を使用していた。今回の報告にあたって、より本来的な名称を使用することとして、遺跡



第 36 図 新池南古墳地形測量図（1/400）

名を改めた。

この付近の東九州自動車道路線内は谷（溜池）と丘陵が連続する地形となっていて、この調査地の南には大池、東には麻松池があり、西側から麻松池に向かって張り出した丘陵上に町道建設に際して一部発掘調査された古墳が1基残っていて、これは上毛町教育委員会によって調査がなされた。

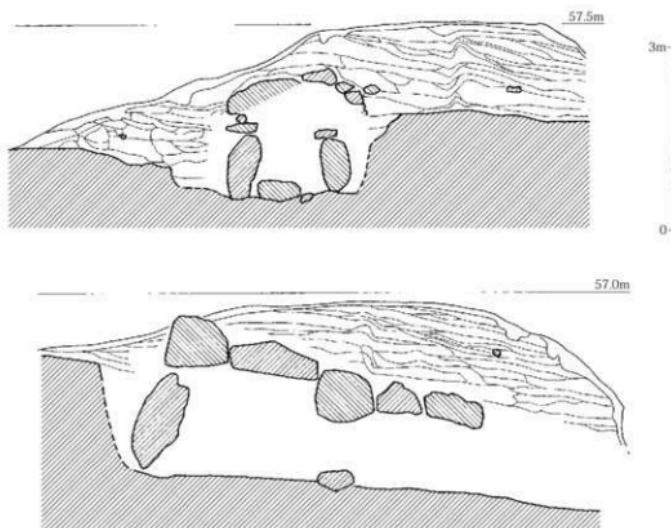
今回の調査は大池の堤の北東部の平地及びその北側の植林された山林を対象とするものであった。平地は試掘調査の結果大きく削平を受けていることが判明、山林では頂部からやや下った南東斜面に直径10mほどの高まりと露出した巨石があって古墳の存在を予想させ、結果的に1基の古墳を確認した。

なお、発掘調査は平成22年8月12日に着手、同11月29日にすべてを終了し、調査面積は約2,000m²であった。本遺跡の調査担当者は報告書原稿一式を残して既に離職している。本稿は担当者が作成した原稿を再構成・加筆したもので、括弧書きは原稿からの引用である。

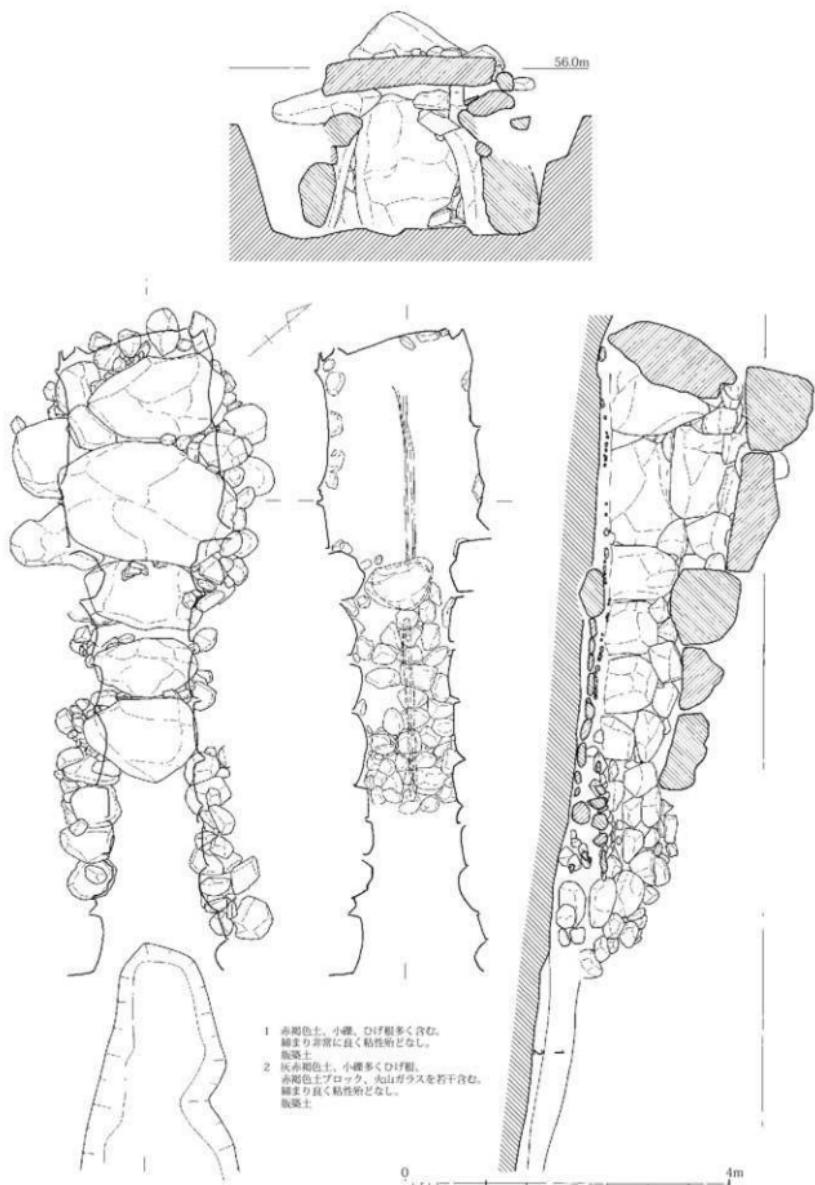
註 大平村教育委員会「下唐原大久保橋迫遺跡 下唐原大久保遺跡 下唐原西方遺跡 下唐原龍右衛門遺跡」（『大平村文化財調査報告書』第11集、2001）

2) 古 墳

大型石材を用いた天井石の一部が露出していて、その北東部が僅かな高まりをもっていた。この石材と高まりを基準としてトレンチを設定したために、結果として主体部縦断方向のトレンチは主体部をかすめることとなった。第37図に示した主体部縦断に示した土層図は主体部と合成したもので、実際と異なっていることを断つておく。



第37図 新池南古墳墳丘土層実測図（1/80）



第38図 新池南古墳主体部実測図1 (1/60)

i) 墳丘（図版 20、第 35・37 図）

第 35 図上の地形測量図は「表土除去後」に作成したものであるという。図に傾斜変換点が書き込まれていないが、主体部の北側で 56.25m の等高線が約 3m の幅をもって走っていて、この間に埴堀を想定できる。ただ、土層図には盛土の北西端が明示されていないのであるが、盛土が傳くなっていることから埴堀に近いのである。この位置は主体部掘形と「周溝」の中間に当たり、主体部南西の埴堀に対応するようである。周溝内側に犬走り状の平坦地があったのかも知れない。南西側では主体部中軸線から 5m の付近に凹部が連続して認められ、土層図では同 4.6m ほどの地点が盛土の裾として図示されているので、埴堀を反映しているのである。

盛土の厚さは最大で 1.4m ほどが残存していて、地山の赤褐色土を主体として部分的に褐色土が入るという。

周溝として図示された遺構は幅 1 ~ 3m ほど、深さ 0.4m の不整形の溝状遺構で、上方に褐色土、下層に暗褐色土が堆積していたという。幅に比して非常に浅い周溝であった。

ii) 主体部（図版 20・21、第 38・39 図）

長方形プランの玄室をもつ单室横穴式石室である。玄室奥壁が大きく内傾しているために、計測する部位で法量が随分と異なるが、図示したものでは長さ 2.6m、幅 1.8m ほどの規模となる。高さは 1.6 ~ 1.8m ほどであった。

奥壁はほぼ 1 個の巨石の上端左右に小石を積んだもので、左右両側壁はそれぞれ 2 個の腰石上に更に 2 段を積み上げて構成されている。「玄室と前室には玉砂利が敷かれてあり、それを除去すると玄室には石材が残らないが、前室と羨道には大型の礫が敷き詰められ」といたという。当地では「玉砂利」だけで構成される敷石ではなく、通常は人頭大の川原石の上に小礫を置くもので、「前室と羨道」の在り方が一般的である。玄室は既に攪乱を受けて石材が抜き取られたものであろう。

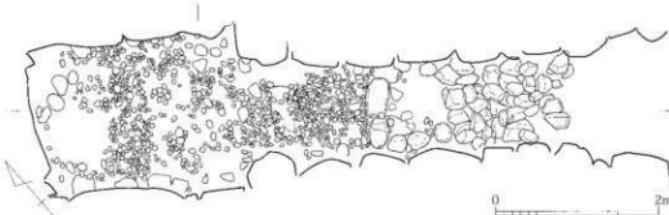
天井石がのる羨道部では側壁の石材を立てているが、天井石のない前庭部では石材が小振りとなり、乱雑に積み上げられた感がある。前庭部まで含めた石室全長は 8 m となる。

閉塞石については、「盗掘口の存在から、取り外されたものと推測」されているが、主体部縦断面図では天井石前端付近で敷石から浮き上がった石材が図示されていて、位置的には閉塞石の残存としてよいものと思われる。

前庭部前面付近から長さ 4.8m、最大幅 2.2m、深さ 0.4m ほどの墓道の掘り込みを検出している。その南東端（前端付近）で土器が比較的まとまって出土した。

iii) 出土遺物

直接古墳に伴う土器として、「石室内」・「石室入り口版築土」・「墓道内土器集中区」・「古墳内」などから出土したとして説明が記されている。「石室入り口版築土」は遺構原図には閉塞石すぐ南



第 39 図 新池南古墳主体部実測図 2 (1/60)

の墓道の縦断土層図に「版築土」の記載があること（第38図）、「堆積状況の確認から、層位的には墓道内土器集中区より下位にある」という記述などから、「主体部に近い墓道埋土中」という意味であると思われる。「古墳内」は表土・盛土除去時のものであろう。そのほか、玉類や金属製品があり、これらは石室内出土であろう。以下で構成を変えて記述を引用するが、土器については編者が改めて記述する。

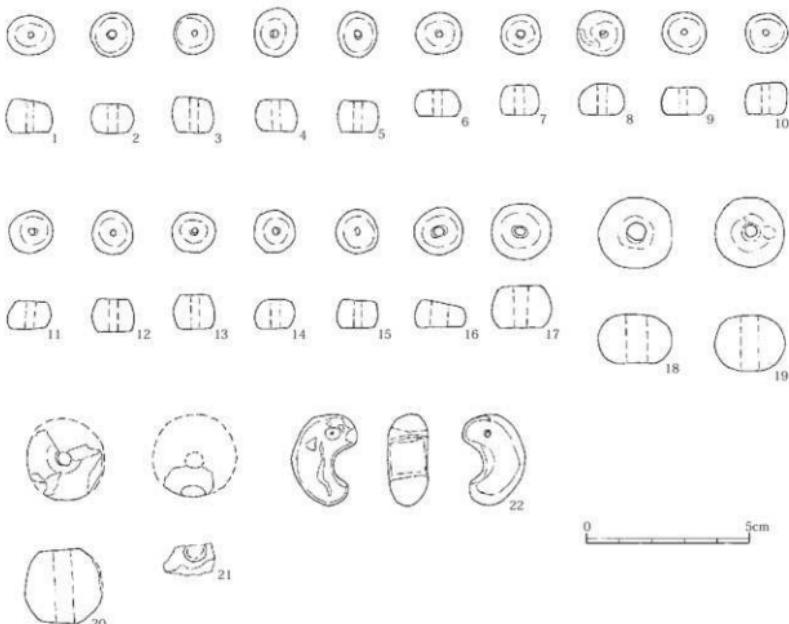
玉類（図版28、第40図）

「1～20はガラス小玉である。1・4～6・8・9は平面が梢円形をなす。2・3・7・10～16は平面が円形をなす。側面は、1・3・5・10・11・16は不整偏球形、2・4・6～9・12～15は偏球形をなす。色調はいずれもコバルトブルーである。17～20はいずれも平面が円形をなす。側面は17～19が偏球形、20が円形をなす。色調は17・20がコバルトブルー、18・19が黒色である。21はトンボ玉である。小片のため側面の形は不明だが、平面が円形をなすと考えられる。コバルトブルーのガラス玉に淡黄色の小玉が埋め込まれる。」

22は翡翠製の勾玉である。やや分厚く、表・裏面と側面の境には面取りが認められない。頭部の孔は表面からのみの金属製の錐によると考えられる片面穿孔である。長さ2.90cm、幅1.90cm、厚さ1.00cm、孔径は表面が0.4cm、裏面が0.15cmを測る。」

金属製品（図版28、第41図）

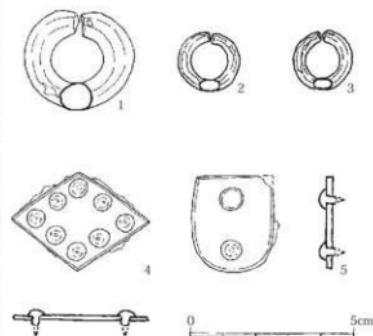
「1～3は耳環である。1は銅地金張で銅地は中空をなす。金張は一部剥落するが全体に残る。2・3も銅地金張であるが、銅地は中空でなく銅芯である。したがって1より重厚感がある。金貼は2・



第40図 新池南古墳出土玉類実測図(2/3)

No.	色調	径(cm)	孔径	高さ(cm)	重量(g)	備考
1	コバルトブルー	1.00	0.15	0.70	0.8	縫スジ、切り口斜め
2	コバルトブルー	0.90	0.20	0.55	0.6	気泡
3	コバルトブルー	0.85	0.10	0.70	0.7	縫スジ
4	コバルトブルー	0.90	0.20	0.60	0.8	気泡、ひび割れ
5	コバルトブルー	0.80	0.20	0.70	0.7	縫スジ、切り口斜め
6	コバルトブルー	0.90	0.20	0.55	0.7	縫スジ
7	コバルトブルー	0.80	0.20	0.60	0.6	ひび割れ、切り口斜め
8	コバルトブルー	1.00	0.20	0.60	0.8	気泡、切り口斜め
9	コバルトブルー	0.90	0.20	0.60	0.6	縫スジ、切り口斜め
10	コバルトブルー	0.85	0.20	0.70	0.7	縫スジ、切り口斜め
11	コバルトブルー	0.90	0.20	0.60	0.8	ひび割れ
12	コバルトブルー	0.80	0.20	0.70	0.7	縫スジ
13	コバルトブルー	0.90	0.20	0.70	0.6	縫スジ若干
14	コバルトブルー	0.80	0.20	0.60	0.7	縫スジ
15	コバルトブルー	0.80	0.20	0.60	0.7	
16	コバルトブルー	1.05	0.30	0.60	0.7	ひび割れ、切り口斜め
17	コバルトブルー	1.20	0.30	0.90	1.8	縫スジ
18	黒色	1.50	0.40	1.00	3.0	気泡
19	黒色	1.45	0.30	1.20	2.9	気泡
20	コバルトブルー	1.00	0.35	1.60	3.1	2/3残存
21	コバルトブルー	1.20	0.40	—	0.4	1/3残存

表3 新池南古墳出土玉類計測表



第41図 新池南古墳出土金属製品実測図(2/3)

3ともに良好に残存する。

4・5は馬具の留金具。4は8つ、5は2つの鉢が残存し、鉢頭は半球形をなす。平面は4が菱形、5が半円形である。4の法量は縦2.6cm、横2.7cm、厚さ0.2cm、鉢頭径0.7cmを測る。5の法量は縦2.9cm、横2.6cm、厚さ0.25cm、鉢頭径0.65cmを測る。」

他に円環状の小型鉄製品の残欠があるが略する。

土器(図版29・30、第42~44図)

「石室内」出土土器(第42図1)1は壺類の体部片で、肉厚である。体部外表面は全体に横撫で仕上げ、下端から底部にかけては雑な箠削りで仕上げている。

「石室入り口版築土」出土土器(第42図2~第43図17) いずれも須恵器である。2~6は杯蓋、7~8は杯身で、特に5・6と7はあらゆる点で共通項が多く、本来的にセット関係にあったものとしてよい。2~4は身受けが水平方向へやや発達し、口縁部が短く直立するよく似た形状となるが、つまみの形状はそれぞれ異なる。いずれも天井部外表面は丁寧な箠削り、それ以外は丁寧に撫でて仕上げていて、全体に胎土・作りとも良好である。いずれも外面に灰を被っている。口径7.6~8.8cm、器高2.6~3.4cmを測る。5・6はつまみの有無は不明であるが、おそらく有していたものと思われる。先の3点の杯蓋に比して身受けが未発達で、口縁部が前代の杯身の形態を引きするよう見える。上記したように、これらが7とセット関係にあることは間違いない、7が蓋ではあり得ない形狀であるためにこの2点を蓋として間違いない。これらも天井部外表面は丁寧な箠削りで仕上げ、それ以外は丁寧な横撫でを施していて、胎土も良好である。また、2点ともに天井部外面上に灰を被る。

7は平底に近い底部から内側しつつ椀形のように立ち上がり、口縁部を小さく外反させる。単独であれば椀としたいところである。これも胎土・作りとも良好で、外底面も丁寧な箠削りで仕上げている。8は7に似るが丸底の底部となり、外底面は不定方向の雑な箠削りで仕上げているが、それ以外は丁寧な作りである。

9・10は丸底で口縁部が直立する椀形の土器であるが、外底面は8と同じような雑な不定方向の箠削りで仕上げている。また、いずれも焼成が甘い。復元口径は8.2・9.2cmである。

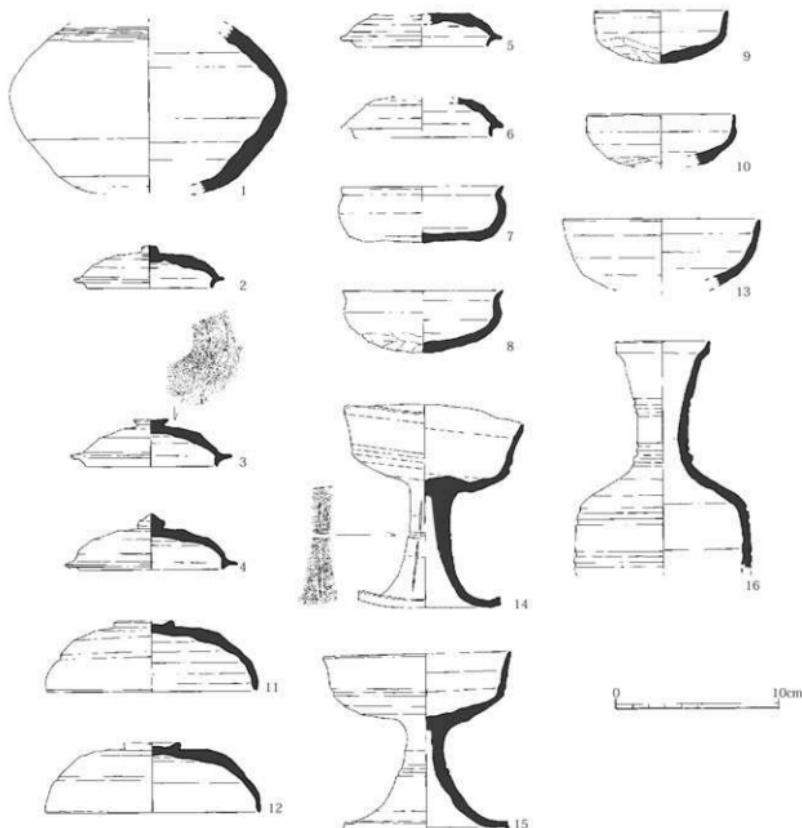
11・12は高杯の蓋であろう。いずれも天井部は高く丸くなり、扁平なつまみを付す。天井部外表面の箠削りや横撫では丁寧になされている。両者ともほぼ完存する。

13も楕形の器形となるが、高杯の可能性もある。14・15は高杯。14は焼け歪んで全体に灰を被る完形品。脚部は四線で上下を区画し、上方に4本、下方に3本の透孔を意識した沈線を刻んでいるが、それぞれの間隔は等間隔でない。細部の作りはシャープで、胎土に黒色粒が目立つ。15は楕形に近い杯部をもち、加飾は杯部・脚部中位の四線だけである。これは杯部内面から外表、脚部内面まで灰を被って黒化する。

16は図示部がほぼ完存する長頸壺で、胎土・作りは良好である。口縁部は小さな二重口縁状とし、頸部下端に断面三角突帯、頸部中位と肩部・体部に2条を1単位とする沈線を刻んでいる。これも口縁部内面から外表にかけて灰を被る。

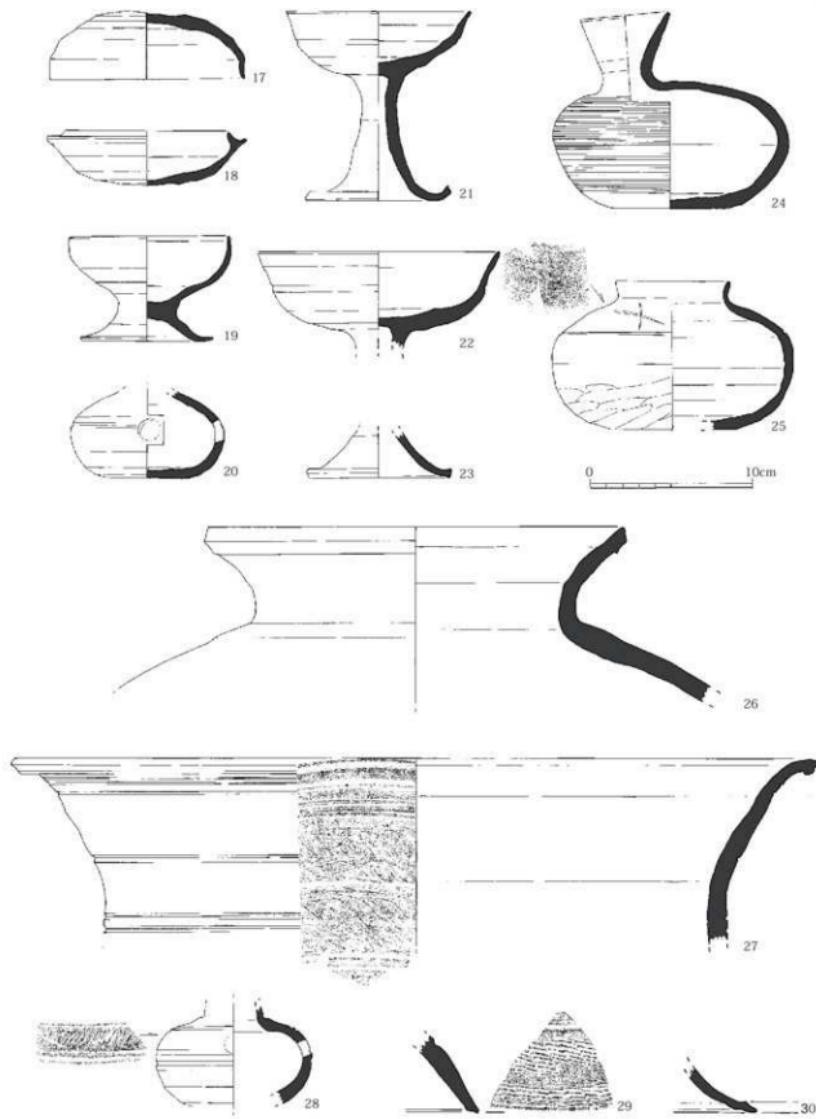
17・18はセット関係にあると思われる蓋杯で、17は「石室入り口版築土」から、18は墓道前端付近の「墓道内土器集中区」から出土している。17は口縁部付近の2/3が残存、口径12.0cm、器高4.0cmに復元できる。天井部は丸く、頂部は範切りの後は未調整で終わる。焼成が甘い。

「墓道内土器集中区」出土土器（第43図18～27）18は口径10.0cm、器高3.3cmに復元でき



第42図 新池南古墳出土土器実測図1 (1/3)

る杯身で、これも外底面は籠切り後未調整で終わり、焼成が甘い。19は脚付椀とすべきであろうか。椀は深く、体部から口縁部かけて緩く内彎して終わる。脚部は低く、大きく開く。体部下半の籠削りや横撫で調整は丁寧である。20は下膨れとなる体部、平底に近い底部となる腰片。

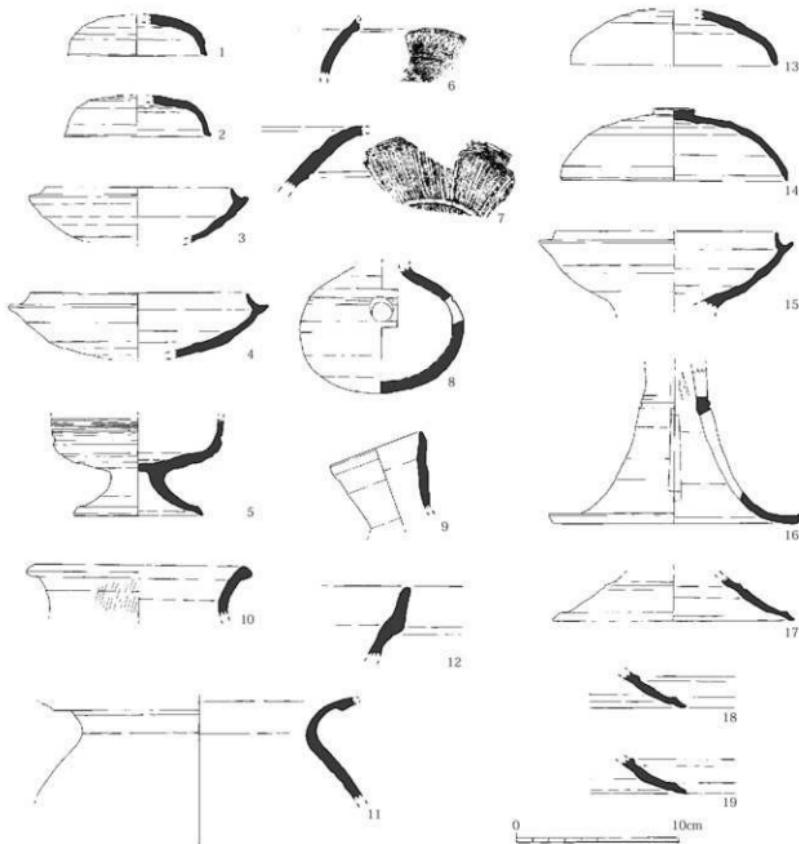


第43図 新池南古墳出土土器実測図 2 (1/3)

21～23は高杯。21は杯部・脚部が接合しえないが図上復元している。杯部は外面中位に沈線を巡らせて、口縁部は緩く外反して終わる。脚部は1/4ほどのが残片であるが、沈線や孔の痕跡は見えない。脚端部が反転しているが、これは焼け歪みのためである。22は口縁部が緩く外側して終わる杯部片で、これも外面中位に甘い沈線を刻む。外面下端付近は回転箝削りで終わる。23は脚部片で、外面は灰が飛んで器表が荒れている。

24はほぼ完存する平瓶で、体部・底部は全体をカキ目で仕上げている。現状で底面に特別な痕跡は見えないので、口頸部付近を塞いで付け替えたものであろう。25は体部が扁平となる短頸壺。肩部に甘い沈線を巡らせ、底部付近は不定方向の箝削りで仕上げている。肩部にシャープな箝記号を刻んでいる。

26は胎土・作りとともに良好な壺であるが、体部は内外面の器表が広く剥離している。また、縱方向で30片ほどに細片化していて、偶然とは思えない割れ方である。27は焼け歪み、外面が黒化した壺片。頸部に繊細な櫛描波状文を巡らせる。



第44図 新池南古墳出土土器実測図3(1/3)

「古墳内」出土土器（第 43 図 28～30）28 は図示部が完存する趣で、孔の一部が残存する。上下を幅が異なる 2 条の沈線で画された文様帶に斜位の沈線を刻む。29 は器台であろうか、脚端部の小片。30 は端部を小さく断面三角形とする小片で、高杯脚部であろうか。あまり類例を見ない器形である。

3) その他の遺物

古墳の北側、高位の尾根線上は平地となっていた。コンクリート基礎やブロックが散在していることから、かつては住宅が置かれていたのであろう。この平地にトレンチを設定したところ、バンケース 1 箱分の土器が出土した。

「トレンチの土層観察から古墳の基底部に近いと思しき版築土状の土層堆積の存在が判明し、建物建造以前には 1 基以上の古墳が存在しており、そこから出土した土器群が」検出されたのではないかと推測されている。が、この土器群の出土状態の記録はなく、「古墳の基底部に近いと思しき版築土状の土層堆積」の記録は残されているが、報告書には記載されていないことから詳細はわからない。

以下で、平地東端付近から出土した土器を紹介する（図版 30、第 44 図）。

1・2 は口端部に面をもつ小型品で、壺類の蓋であろう。いずれも口縁部付近で 1/3 が残存し、天井部の回転箆削りや横撫では丁寧になされ、胎土も良好。口径はそれぞれ 6.6cm・9.0cm である。

3・4 は胎土・作りともに良好な杯身。5 は脚付椀であろうか。椀部は下位に沈線を巡らせてそれ以上をカキ目で覆い、沈線のやや下方に小さな段を付してそれ以下は丁寧な箆削りのままで終わる。6～8 は趣であろう。6 では頸部上段に櫛描きではない浅い波状文のような文様が見える。7 は箆を用いた直線文を縱位に多用する頸部。8 は球形体部となり、孔上部にしっかりとした沈線を 2 条巡らせるが文様はない。孔以下は丁寧な回転箆削り、沈線以上はカキ目で仕上げる。9 は平瓶の口縁部。10・11 は甕。10 では頸部に斜位の刷毛目が残る。12 は二重口縁状となるが、あまり見ない形態である。内面に灰を被るが、脚とすべきであるかも知れない。

13・14 は高杯の蓋で、13 はつまみが取れているように見える。いずれも調整は丁寧になされている。15 は有蓋高杯。16 は 2 段 2 方向に透孔をもつ高杯脚部。17～19 は端部を小さく屈曲させる土器で、脚部としているが口縁部の可能性もある。

4) 小結

この新池南古墳は玄室の規模が長さ 2.6m、幅 1.8m ほどの単室横穴式石室で、石室の全長は 8m ほどの規模である。周溝から主体部石組の前端までの距離は 13m を測り、盛土端がはっきりしないが、15m ほどの円墳であったものと思われる。本墳の東に近接していた下唐原大久保構追 1～3 号は、いずれも周溝内径で直径 15m ほどの円墳であり、本墳も含めて同程度の規模の古墳が集まっていたようである。また、1 号墳は玄室が残っていなかったが、前室をもつ複室構造、2 号墳は玄室の規模が長さ 3.3m、幅 1.7m、全長 6m ほどの単室横穴式石室であった。大久保構追 1・2 号墳と比べれば、初現の須恵器はいずれもほぼ同様の 6 世紀後葉、下限はこの新池南古墳のみが須恵器蓋杯が逆転する時期の土器を含んでいて、7 世紀中頃まで使用されたようである。

最後に、調査担当者が末尾に記していた 2 点について掲載しておく。

・頸基部突帯付瓶（図版 29・第 42 図 16）

墓道の下層堆積に相当する石室入口版築土から須恵器の頸基部突帯付瓶が 1 点出土している。この種の土器については、亀田修一氏が「頸基部突帯須恵器」と呼び、豊前西部地域の類例を挙げて、「大伽耶地域に属する陝川地域の古墳群で比較的多くみることができ、統一新羅様式の瓶形土器にもみられる」ことを指摘している。

その後、築上郡・上毛郡域にも資料が散見され豊前地域における類例は以下に示すように 6 遺跡 7 例となり、本墳の新例によって 7 遺跡 8 例（町内では 2 例）を数えるまでになった。

- ・長谷池 B-1 号横穴墓〔田川市〕（7世紀）…長頸壺 1 点
- ・伊田狐塚 A-1 号横穴墓〔田川市〕（7世紀）…長頸瓶 1 点
- ・経塚 1-4 号横穴墓〔田川市〕（7世紀中頃）…長頸壺 1 点・小型長頸壺 1 点
- ・黒部 6 号墳〔豊前市〕（7世紀中頃）…長頸壺 1 点
- ・荒堀兩久保遺跡〔豊前市〕（7世紀後半）…長頸壺 1 点
- ・下野地 2 号墳〔上毛町（旧大平村）〕（7世紀中頃～後半）…長頸壺 1 点

いずれも須恵器製で、器種は長頸壺が多く長頸瓶（水瓶形）が 1 例みられる程度であるが、本例は事例的には少ない長頸瓶である。いずれも器形や焼成具合から在地産とみられるが生産地は未確認である。時期的には伴出遺物から全て 7 世紀の所産と考えられ、とくに 7 世紀中頃から後半にかけての時期に多いようである。本例は瓶形というだけでなく、細部の器形的な特徴も伊田狐塚 A-1 号横穴墓例と類似しており、同時期の所産の可能性があり 7 世紀中頃を中心とする時期が考えられる。

なお、「頸基部突帯須恵器」の分布域は、現状では古代における田河郡域と上毛郡域にほぼ集約されており、両地域とも古墳時代における渡来系文化の流入が非常に顕著であることから、人的移動も含めた外来文化の受容に対する積極さの一端をうかがうことができる。

・トンボ玉（図版 28・第 40 図 21）

本墳から出土したトンボ玉は、コバルト着色による青紺色ガラス玉に黄色ガラス玉を埋め込んだもので、安永周平氏の分類では「斑点文トンボ玉」に相当する。同氏による 2006 年時点での全国的な集成によると、福岡県内でも筑前・筑後で散見される程度で、現在でも豊前地域では管見の限り出土例は見出せない。

トンボ玉の出土例自体は弥生時代まで遡るが、古墳時代では 5 世紀中ごろに古墳への副葬遺物として出現し、事例が少なく優品が目立つことから舶載品とみられている。その後、6 世紀後半になると全国的に増加する傾向にあるが、色調の単純化、象嵌の粗雑化などが進むことから国産化すると考えられている。先述のように本例は、青紺色の親玉に黄色の斑点を埋め込むもので、国産品とされる典型例である。仮に初葬に伴う遺物であるとするならば 7 世紀初頭～前葉墳の年代観が与えられ、製作時期は遡る可能性があるにしても「斑点文トンボ玉」としては比較的新しい段階に位置づけられる。

ちなみに、安永氏はわが国における「斑点文トンボ玉」の祖形を新羅の斑点文象嵌琉璃玉（慶州天馬塚出土例）に求めている。この説が当を得ているならば、本例も新羅系遺物の模倣品（国産品）ということができ、頸基部突帯付瓶とともに新羅的様相を示す遺物といえるが、韓国における類例も少なく、類例の検討や原料成分の分析などを含め結論を出すには至っていない。

参考文献

- 大分県教育庁埋蔵文化財センター「伊藤田窯跡群発掘調査報告書」(『大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書』第50集、2010)
- 亀田修一「豊前西部の渡来人—田川地域を中心にして—」(『福岡大学考古学論集一小田富士雄先生退職記念—』、2004)
- 小林行雄「弥生・古墳時代のガラス工芸」(『MUSEUM』No.324、1978)
- 中津市教育委員会『伊藤田城山窯跡群』(『中津市文化財調査報告』第5集、1985)
- 安永周平「双六古墳出土の装飾付ガラス玉(通称トンボ玉)について」(『岐阜市教育委員会「双六古墳」』『老岐市文化財調査報告書』第7集、2006)

IV 終わりに

土佐井遺跡2区、土佐井小迫遺跡・唐原山城跡などでは顯著な遺構は認められず、遺物もわずかで終わった。穴ヶ葉山南古墳群では小規模な円墳2基、新池南古墳でも同様な古墳1基の調査を行った。これらの古墳はいずれも6世紀後葉から7世紀前葉に築造されたもので、石室の形態も地域で通有のものである。新池南古墳の墓道からは蓋杯の逆転した形態のものが一定程度出土していることから、7世紀中葉頃まで使用されていたようである。

この山国川左岸では前期古墳が数例知られているが、5世紀～6世紀前半の古墳は現在のところ皆無といってよい状況である。唯一、吉富町櫛生山古墳が赤色塗彩された竪穴式石室を主体部とし、埴輪を有する前方後円墳であったと復元されているが、主体部発掘は昭和2年(1927)のこと、現在は墳丘も大きく損壊している。一方で、上毛町池ノ口遺跡・安雲ハタガタ遺跡などでは1期の須恵器が出土していて、集落の存在は確かめられている。また、新池南古墳の東北方、400mほどの地点で5世紀後半頃の、また山国川に近い百留梅ノ木遺跡でも時期不明の埴輪焼成窯が発見・調査された。上毛町内で埴輪を作った古墳は未見であり、埴輪窯の運営主体や供給先が問題となる。運搬のこと一つを考えても埴輪窯が供給先と無縁な地に営まれることは想定しづらいことなので、卑近に該期の未見の古墳が存在するのであろう。

ところが、6世紀後半になると山国川やその支流の友枝川流域で堰を切ったように古墳が築造されていて、ことに山国川左岸の段丘上は無数の古墳があって、中には直径30～40m規模の古墳も見られる。

6世紀の北部九州における大きな出来事といえば筑紫国造磐井の乱(527年)とそれに続く屯倉の設置であろう。『日本書紀』によれば、安閑天皇2年(535)に現在の福岡県を中心に8ヶ所の屯倉が設置されたと記されているが、山国川に最も近い場所は京都郡苅田町に比定される「肝等」及び田川郡赤村に比定される「我庭」で、直線距離にして30kmほどを隔てている。屯倉からの直接的な影響はともかく、中央権力による地域支配の強化、地域の再編といった政策が併行して実施されたものと思われ、その中で山国川流域の社会が大きく変貌したものであろう。

註

- 1 福岡県教育委員会「池ノ口遺跡」(『一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第3集、1996)
- 2 新吉富村教育委員会「垂水庵寺II 宇野地区遺跡群I」(『新吉富村文化財調査報告書』第12集、1999)
- 3 上毛町教育委員会「下唐原大久保横迫遺跡 下唐原大久保遺跡 下唐原西方遺跡 下唐原龍右衛門遺跡」(『大平村文化財調査報告書』第11集、2001)

図 版



図版 2

土佐井遺跡
2C-4 区

1. A区南西壁上層
(東から)



2. B区南端溝
(北から)



3. C区中央溝
(北東から)





1. 全景
(北西上空から)



2. 全景
(上空から)

図版 4

土佐井小道道路



1. 全景
(西上空から)



2. 全景
(上空から)



1. I区全景
(上空から)



2. II区全景
(上空から)

1. 中央 Tr. 南壁中央
中央寄り（北から）



2. 中央 Tr. 南壁中央
（北から）



3. 中央 Tr. 南壁
中央西寄り
（北から）







1. 唐原山城跡と
東坑口区
(南東から)



2. 唐原山城跡東坑
口区第1トレンチ
(南西から)



3. 唐原山城跡東坑
口区第2トレンチ
(北西から)



1. 全景
(南東上空から)



2. 全景
(上空から)

図版 10

穴ヶ葉山南
古墳群 2 次

1. 5・6号墳現況
(南西から)



2. 5号墳現況
(北西から)



3. 5号墳
主体部現況
(北から)





1. 5号墳埴丘
北東畔上層
(南東から)



2. 5号墳埴丘
南西畔上層
(南から)



3. 5号墳埴丘
南東畔上層
(東から)





穴ヶ葉山南
古墳群 2 次



1. 5号墳主体部
石材転落状況
(北東から)



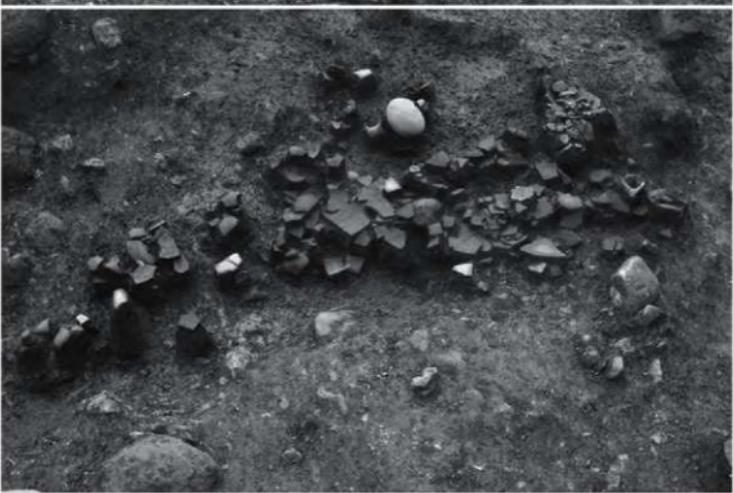
2. 5号墳閉塞と
墓道土器出土状況
(北西から)



3. 5号墳墓道
土器出土状況
(南西から)



1. 5号墳埴丘北西部出土器出土状況
(北から)



2. 同
(北から)



3. 5号墳埴丘南西部
出土器出土状況
(南西から)

穴ヶ葉山南
古墳群 2 次



1. 6号墳観况
(北から)



2. 6号墳北西壁土層
(北から)



3. 6号墳南東壁土層
(南から)



穴ヶ葉山南
古墳群 2 次

1. 6号墳埴丘北部
上器出土状況
(南西から)



2. 同
(西から)

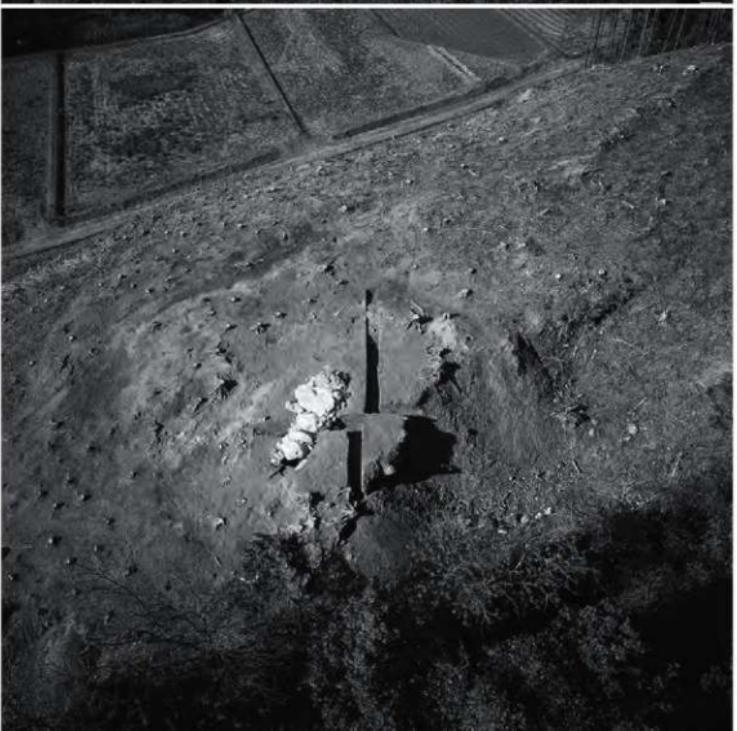


3. 同
(北から)





1. 全景
(南上空から)



2. 天井石露出後
(東上空から)



1. 現況
(西から)



2. 表土除去後
(南から)



3. 天井石露出後
(南東から)



1. 主体部 1
(南東から)



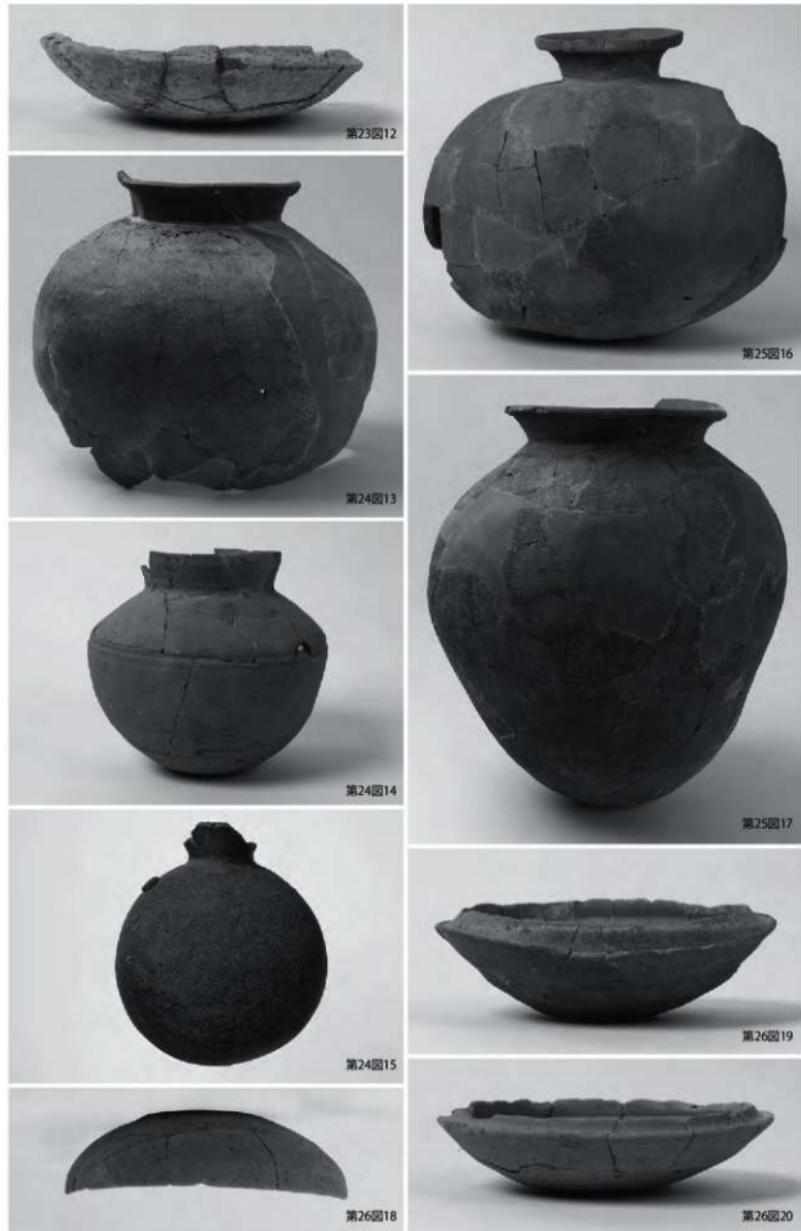
2. 主体部 2
(北西から)



3. 主体部 3
(北西から)



穴ヶ葉山南古墳群出土遺物 1



穴ヶ葉山南古墳群出土遺物 2



第26図21



第26図22



第26図25



第26図27



第26図30



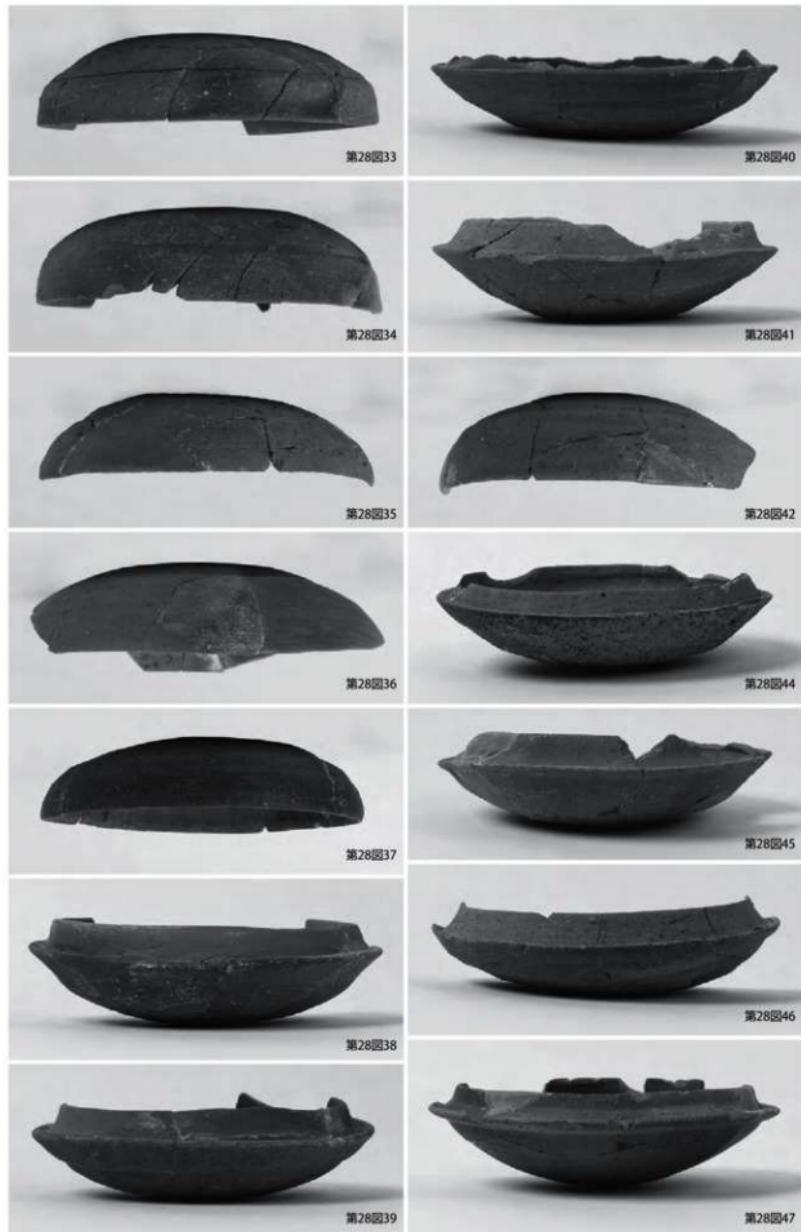
第26図24



第26図31



第26図32



穴ヶ葉山南古墳群出土遺物 4





穴ヶ葉山南古墳群出土遺物 6



第33図9



第33図13



第34図18



第33図14



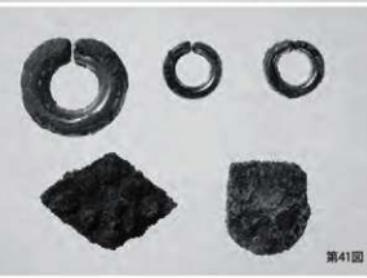
第40図



第40図



第34図17



第41図

穴ヶ葉山南古墳群出土遺物 7・
新池南古墳出土遺物 1



新池南古墳出土遺物 2



新池南古墳出土遺物 3

報 告 書 抄 錄

ふりがな	つっさいいせきよく つっさいおさこいせき とうばるさんじょうあと あながはやまみみなみこふんぐんじ しんいけみなみこふん						
書名	土佐井遺跡2区 土佐井小追遺跡 唐原山城跡 穴ヶ葉山南古墳群2次 新池南古墳						
副書名							
巻次							
シリーズ名	東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	16						
編著者名	飛野博文(編)・吉村靖徳・荻幸二						
編集機関	九州歴史資料館						
所在地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3 ☎0942-75-9575						
発行年月日	西暦2014年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度 東經 度 調査期間 調査面積 調査原因				
ワカイレセキ 土佐井遺跡2区	福岡県築上郡上毛町 おおざわこうさい 大字土佐井1380-2-747-14ほか		33度 34分 1秒	131度 9分 1秒	20110202～ 20110325 20110419～ 20110531	1,600m ² 600m ²	
ワカイレセキ 土佐井小追遺跡	福岡県築上郡上毛町 おおざわこうさい 大字土佐井652ほか		33度 33分 46秒	131度 9分 36秒	20101108～ 20110314	1,700m ²	
ヨウゼンショウ 唐原山城跡	福岡県築上郡上毛町 おおざわこうさい 大字下唐原2241-4ほか	40646	33度 33分 46秒	131度 9分 46秒	20120416～ 20120531	90m ²	東九州自動車道建設
あながはやまみみなみこふんぐんじ 穴ヶ葉山南古墳群2次	福岡県築上郡上毛町 おおざわこうさい 大字下唐原2260-22ほか		33度 33分 42秒	131度 9分 59秒	20100705～ 20110131	4000m ² (1,600m ²)	
しんいけみなみこふん 新池南古墳	福岡県築上郡上毛町 おおざわこうさい 大字下唐原1685-77ほか		33度 33分 40秒	131度 10分 16秒	20100812～ 20101129	600m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
土佐井遺跡2区	集落・散布地	弥生～中世	溝・柱穴	土器若干			
土佐井小追遺跡	散布地	新石器～後代	「版築」状堆積・「柱穴列」	弥生～中世土器片			
唐原山城跡	山城	古代	なし	なし			
穴ヶ葉山南古墳群2次	古墳	古墳時代	円墳2基（單室横穴式石室）	漆器鏡・刀子・鉈・玉類・土器			
新池南古墳	古墳	古墳時代	円墳1基（單室横穴式石室）	金銅製耳環・玉類・馬具・土器	トンボ玉片あり		
遺跡の概要							
土佐井2区では数条の小規模な溝を検出したのみで、出土遺物も乏しく詳細は不明。土佐井小追遺跡・唐原山城跡は史跡唐原山城跡の山麓での調査であったが、顕著な遺構は確認されなかった。穴ヶ葉山南古墳群では後期の古墳2基を、新池南古墳では同1基の調査を行った。福岡県東部の後期古墳の密集する地域で新たな調査例を加えた。							

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 25	登録番号 9

東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告

- 16 -

福岡県築上郡上毛町所在遺跡群の調査
土佐井遺跡2区・土佐井小追遺跡
唐原山城跡・穴ヶ葉山南古墳群2次
新池南古墳

平成26年3月31日

発行 九州歴史資料館

〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3

印刷 株式会社 四ヶ所

〒838-8512 福岡県朝倉市馬田336